先住民は今

二つの世界に生きる

米国国務省国際情報プログラム局

米国国務省　2009年６月
第14巻第６号

http://www.america.gov/publications/ejournalusa.html

国際情報プログラム局

発行責任者	Jeremy F. Curtin
編集主幹	Jonathan Margolis
クリエイティブ・ディレクター	George Clack
編集長	Richard W. Huckaby
副編集長	Lea Terhune
制作	Chris Larson
グラフィックディレクター	Sylvia Scott
ウェブ制作	Janine Perry
原稿整理	Rosalie Targonski
写真編集	Ann Monroe Jacobs
表紙デザイン	Timothy J. Brown
参考資料担当	Martin Manning

表紙カバー

ケイ・ウォーキングスティック（Kay WalkingStick）作。“Over Lolo Pass”（2003）　グワッシュ画・木炭画・蜜ろう画法。自身がチェロキー族との混血であるウォーキングスティックは、時として混血の祖先だけでなく地と空、物質と精神の関係など生命の両分法について論じる。ジプチカ絵、スケッチ、版画などにその影響が多く見られる。

© Kay WalkingStick

米国国務省の国際情報プログラム局は、eJournal USA のロゴ名で毎月電子ジャーナルを発行し、米国や国際社会が直面する主要な問題、ならびに米国の社会や価値観、考え方、様々な制度について検証しています。

最新号は毎月まず英語で発行され、続いてフランス語、ポルトガル語、ロシア語、スペイン語版が発行されます。必要に応じてアラビア語、中国語、ペルシア語の翻訳版が発行される場合もあります。ジャーナルはそれぞれ、発行巻数（出版された年の番号）と、号数（1年間に発行された各号の番号）別に目録に掲載されます。

ジャーナルの中で提示された意見は、必ずしも米国政府の見解や政策を反映するものではありません。米国国務省は、ジャーナルがリンクするインターネット・サイトの内容、およびこれらのサイトへの継続的な利用の可能性について、一切の責任を負いません。各サイトについての責任は、サイトの発行者のみに帰属するものとします。ジャーナルに掲載される記事や写真、イラストは、著作権についての明記がない限り、米国外での複製や翻訳を認めますが、明記があるものについては、ジャーナルに記載されている著作権保有者の許可を得なければなりません。

国際情報プログラム局は、http://www.america.gov/publications/ejournals.html で、ジャーナルの最新号とバックナンバーを数種類のデータ形式で提供しています。ご意見等は、最寄りの米国大使館、または下記の編集部までお寄せください。

Editor, *eJournal* USA
IIP/PUBJ
U.S. Dpartment of State
301 4th Street, SW
Washington, DC 20547
United States of America
E-mail：eJournalUSA@state.gov

編集・発行：米国大使館レファレンス資料室（2010年４月）
本号の日本語文書は参考のための仮翻訳であり、正文は英文です。

本号について

ファースト・ネイション(特にカナダのイヌイットなど)、アディバシー(インドの先住民族)、アメリカインディアンといった先住民は、トライバル（部族民)、ネイティブ、アボリジナル・ピープルなどと呼ばれるが、その呼称がどうであれ、ある特定の地域に古代から住み続けてきた民族集団のことである。また近代史以前からその地に居住していたことから、オリジナル・インハビタント（元から住んでいた人々）という言葉が使われることも多い。

eJournal USA 本号で筆者たちが明らかにしているように、世界各地の先住民は長い間、征服と植民地主義の歴史を耐え忍んできた。多くの地域の先住民が、戦争や疫病で命を落とし、絶滅に追い込まれ、意思に反して移住させられ、また「文明社会」の価値観を教え込むためと称して、子供たちは寄宿学校に送られた。ヨーロッパからの入植者たちは、ほとんどの場合、まったく異なる先住民の価値体系や世界観を理解せず、認めもしなかった。しかし、この数十年、多くの国の政府は、何世紀にもわたって先住民に与えた被害を認め、過去の過ちを償う努力を続けている。

これらの諸国は、先住民の国民としての権利を認め、その経済的発展や、文化の保護を支援するため、法的手段の整備を進めてきた。非政府組織も、同様の目標を掲げて活動を続けている。こうした活動により、いくつかの地域で、先住民文化の復興が始まっている。また 2007 年 9 月 13 日、20 年にわたる各国政府と先住民族間の交渉でまとまった「先住民族の権利に関する国際連合宣言」が国連総会で採択され、先住民の権利拡大が進んだ。

© AP Images/ Coeur d'Alene Press, Jason Hunt

アイダホ州で開かれた「パウワウ（集会の意)」で踊りを披露するナバホ族のダンサー。パウワウは、アメリカインディアンの文化を称賛し、部族の伝統の保存を図る行事である。

本号に掲載されている小論は、そのほとんどが、先住部族の血を引く専門家によるもので、先住民の視点から書かれている。チェロキー・ネイションの首長であったウィルマ・マンキラーは、過去を生かすことによって、先住民族のために確固とした未来を築く取り組みについて書き、「最大の課題のひとつは（中略）祖先から引き継いだ知識体系を将来に伝えていくことであろう」と述べている。ユピック族長老のアンガユクアーク・オスカー・カワグリーは、「わたしは切り離すことのできない母なる自然の一部として育った」と述べている。ユピック族は、彼らの住む壊れやすい北極圏の地に気候変動が及ぼす影響に適応しようと、伝統的な知識を近代科学に結び付けてきた。

ブルース・E・ジョハンセンは、その統治方法が米国の建国の父祖たちに影響を与え、ひいては合衆国憲法に反映されることとなったアメリカインディアンの物語を語り、ジェイス・ウィーバーは、アメリカインディアンと連邦・州政府制度との法的関係の進化について詳述している。

先住民の言語は、実用的な知識と精神的な象徴性に富み、多様な文化の重要な要素を包含しているが、今や急速に消滅しつつある。ルイーズ・アードリックは、自分の母語であるオジブウェ語の奥深さについて書き、アキラ・Y・ヤマモトは、なぜ「すべての言語ひとつひとつが貴重である」のか、そして、それをどうしたら保存できるかについて説明している。さらに、バイン・デロリア・ジュニアとジョセフ・ブルチャックは、先住民文化が環境に対して持っている本質的な畏敬の念を描写している。

グローバリゼーションによって、先住民集団間のネットワーク作りが可能になり、それぞれの地域社会の外側での対話の構築が進んでいる。こうした交流のさまざまな側面について、本号は、国立アメリカインディアン博物館（NMAI）の中南米局ディレクターであるホセ・バレイロへのインタビューのほか、ノーステキサス大学の「国際先住民およびアメリカインディアン・イニシアティブ」プログラムを紹介するジョナサン・フックの記事、インドのアディバシーの人々による市民ジャーナリズムに関するシュブランシュ・チョーダリーの記事を掲載している。

フォトギャラリーでは、芸術の分野や社会における先住民の姿の一端を紹介する。「先住民文化は、多様な輝きを放っている」と NMAI の歴史家で学芸員でもあるガブリエル・タヤックは書いている。

編集者一同

U.S. DEPARTMENT OF STATE / JUNE 2009 / VOLUME 14 / NUMBER 6
http://www.america.gov/publications/ejournalusa.html

先住民は今— 2 つの世界に生きる

概観

4 **21 世紀の先住民**
ウィルマ・マンキラー
現代において先住民であるということは、大事なものとして尊ばれている伝統や文化や言語と、技術に支配された世界の要求とのバランスを保つことを意味する。マンキラーはチェロキー・ネイションの元首長。

7 **ネイティブアメリカの生きている伝統**
ガブリエル・タヤック
豊かな古い伝統、長年の苦闘と差別、現代における生活などと折り合いをつけて、先住民族は価値ある古いものと新しいものを両立させなければならない。タヤックはピスカタウェイ族の血を引く歴史家。

大地との結び付き

10 **わたしの場所、わたしのアイデンティティー**
アンガユクアーク・オスカー・カワグリー
アラスカと北極圏に住むユピック族の世界観は、現代科学と連動させて地球温暖化への適応を図れば、地球に利益をもたらす可能性がある。カワグリーは先住部族の長老。

先住民の民主的な価値観と統治

12 **アメリカ先住民の統治理念と合衆国憲法**
ブルース・E・ジョハンセン
先住民の民主主義に対する考え方は、米国建国の父たちにインスピレーションを与えた。

16 **振り子のように揺れるインディアン政策**
ジェイス・ウィーバー
先住部族と米国政府の独特の関係は、条約や、同化政策と部族の自治という時として矛盾をはらんだ政策を通じて、何世紀もかけて発展した。ウィーバーはチェロキー・ネイションの弁護士で歴史家。

19 **ギャラリー　人々とアート**
先住民には国の指導者もいれば、作家、俳優や演奏家、芸術家もいる。彼らは世界中のさまざまな先住民コミュニティの出身者である。

25 **真実の灯を掲げ、勝利した先住民所有の新聞**
ティム・ジアゴ
米国初の広域配布のアメリカ先住民新聞の創刊者兼編集者が、インディアン居住地域にジャーナリズムが及ぼしてきた好ましい影響について述べる。ジアゴはオグララ・ラコタ族の出身。

言語と文化

27 **理解するのは 2 つの言語、だが心に響く言語はひとつ**
ルイーズ・アードリック
タートル・マウンテン・オジブウェ族の血を引く小説家のアードリックが、部族の言語であるオジブウェ語に感じる奥の深さについて述べる。アードリックはオジブウェ語を「精霊と交わるための言語」と呼ぶ。

30 **消滅の危機にある言語**
アキラ・Y・ヤマモト
先住民文化の多くの要素を包含している言語が急速に失われつつある。まだ残っている言語を保護することが極めて重要だと筆者は言う。

抄録

35 **精霊たちの世界**
バイン・デロリア・ジュニア
アメリカ先住民の伝統的な信仰では、大地、空、植物、

動物、そして精霊の世界が、祖先の話と共に日々の生活に染み込んでいると、この今は亡きスタンディング・ロック・ダコタ族の学者は言う。

37 儀式
ジョセフ・ブルチャック
アベナキ族の血を引く語り部のブルチャックが、先住民コミュニティの精神的・肉体的健康の柱である伝統的な儀式について、個人で行うものから大勢が参加するものまで、例を挙げて説明する。

国境を越える連帯

39 グローバルな会話　ホセ・バレイロへのインタビュー
リー・ターヒューン
バレイロはタイノ族の血を引くキューバ生まれの学者。インタビューでは、ラテンアメリカの先住民が抱える課題と彼らの優れた回復力、また先住民の文化と権利を守るために何が行われているかについて論じる。

42 インドにおける CGNet と市民ジャーナリズム
シュブランシュ・チョーダリー
草の根レベルでオンラインの市民ジャーナリズムを推進するプロジェクトの助けを借りて、インドの農村部に住むアディバシーと呼ばれる「原住民」が自分たちの福祉にとって重要な問題について声を上げる。

44 世界的な先住民ネットワークの構築に向けて
ジョナサン・フック
ノーステキサス大学（UNT）の新たな取り組みなど、世界各地の先住部族をつなぐプログラムにより、相互理解が深まるとともに、共通の課題認識とグローバルな一体感が生まれつつある。フックはチェロキー・ネイションの一員で、UNT のプログラムを指揮している。

47 補足資料

21 世紀の先住民

ウィルマ・マンキラー

ウィルマ・マンキラーは、チェロキー・ネイションの元首長で、同部族では初の女性首長を務めた。著作活動のほか、長年にわたって先住民のための人権運動に従事しており、1998 年、大統領自由勲章を受章している。

世界中の先住民たちを待ち受けているのは、どんな未来であろうか。そして、21 世紀に先住民として生きるということは、何を意味するのであろうか。

こうした問いに対する答えは、事実上世界のすべての地域に居住している総計 2 億 5 千万人から 3 億人に上る先住民たちの間で、大きく異なるであろう。約 5000 に分かれる先住民族集団は、それぞれに独特の歴史、言語、文化、統治システム、生活様式を持ち、極めて多様性に富んでいる。漁、狩り、食料採集に頼る生活を続けている民族もあれば、多角的な事業を経営している民族もある。

世界中の先住民族集団は、自分たちの土地や天然資源、文化的慣習を守る戦いにおいて共通の課題を抱えている。先住民の歴史や現在の暮らしぶりをよく知る人があまりにも少ないため、彼らの人権や土地所有権を守る戦いが測り知れないほどの困難に直面しているのである。そして、歴史的、文化的背景を抜きにしては、現在の先住民の問題を理解することはまずできない。

植民地主義に根差した問題

世界中の先住民が直面する課題について考える際に重要なのは、多くの社会的、経済的、政治的問題の根源が、植民地政策にあったことを思い起こすことである。世界中の先住民族は、「発見」され、自らの領土への植民の拡大を余儀なくされた結果、おびただしい数の命と何百万ヘクタールにも及ぶ土地や天然資源を失ったという共通の経験によって結び付いている。先住民は、その最も基本的な権利を無視され、彼らを入植者たちの社会や文化に同化させようとする一連の政策の下に置かれた。そして、多くの場合、これらの政策は、貧困、高い幼児死亡率、失業のまん延、薬物乱用と、それに付随するすべての問題を生み出したのである。

多くの先住民およびその権利擁護グループの努力が実り、2007 年 9 月 13 日、国連総会で「先住民族権利宣言」が採択された。大多数の国はこの宣言に賛成票を投じたが、米国、ニュージーランド、カナダ、オーストラリアは反対した。しかし、この 4 カ国の姿勢も変化してきている。オーストラリアのケビン・ラッド首相は最近、オーストラリアもこの宣言を承認すると発表した。これは、オーストラリアの先住民族アボリジニにとってだけではなく、世界中の先住民族にとって大切な一歩である。また 2008 年大統領選におけるバ

© Ernie Panicciolli

古代と現代の遭遇。伝統的な踊りの衣装に身を包んでエスカレーターを下りるアメリカインディアン

ラク・オバマの勝利に伴い、米国も宣言に対する反対の立場を見直すのではないかという期待が高まっている。

国連の先住民族権利宣言は、先住民の自決権および条約権と共に、彼らが「経済的、社会的、文化的発展を自由に追求する」権利を保護するものである。これらの権利の追求に当たっては、祖先伝来の土地に対するアクセスと支配力を確保することが、インドのマニプル地方の住民からペルー、エクアドル、ボリビアのアンデス山地の住民に至るまで、先住民による自決を目指す取り組みの中心課題となる。

先住民は、祖先伝来の土地や資源を徐々に取り戻しながら、自らの経済の発展、コミュニティや部族の再建に向けた努力を続けている。先住民族には多くの個人企業家がいる一方、部族政府やコミュニティが共有するビジネスも驚くべき数に上っている。こうした共同経営事業は、ブラジル・ネグロ川の川岸にある女性織物組合や、ケニアのルオ族による水産物取引事業など、さまざまである。また先住民の製品や事業の展示会も、カナダのウィニペグ、オーストラリアのメルボルンで毎年開かれている。米国では、多くの社会・文化プログラムが、先住民族が経営する出版事業やショッピングモール、カジノなどから得られる収益で運営されている。

先住民族は経済を発展させ社会的問題に取り組む一方で、部族文化、言語、医術、歌、儀式などの保存を重視している。多くの先住民族が、厳しい逆境の中で、伝統的知識、自分たちを長い間支えてきた基本的価値観、そしてひとつの部族としての結束感を維持し続けていることは、奇跡的である。

共通の問題

世界の先住諸民族は、多く面で異なるものの、共通の価値観もいくつか持っている。例えば、彼らは、時として断片的であるにせよ、今までもはっきりと存在する助け合いの感覚や、自分たちの生活がその土地の一部であり切り離せないものであるという明確な認識を持っている。そして、人間のみならずすべての生きものと互いに依存し合っているという彼らの中に深く根付いた考え方が、食料、医薬、そして精神的な糧の聖なる供給元である自然を保護しなければならないという義務感と責任感を奮い立たせているのである。

先住民族のコミュニティでは、価値観が大きな意味を持っており、そこで最も尊敬を集めるのは、物質的な富を築いた人でも、個人的に素晴らしい業績を残した人でもない。最も尊敬されるのは、他の人々を助ける人、そして自分の生活はさまざまな相互関係の中で展開しているのだということを理解している人である。

先住部族の自己統治の仕方も、地域により異なる。米国には、連邦政府と直接的な政府間関係を持つ部族政府が560以上ある。これらの部族政府は、さまざまな主権的権利——例えば、独自の司法システムや警察の運営、学校や病院の経営、多岐にわたる企業経営など——を行使している。そして、数万の雇用を生み出し、各部族が居住している州の経済に、何百万ドルもの貢献をしている。こうした前進はすべて、部族民だけでなく、地域社会全体に恩恵をもたらしている。つまり、米国における部族政府の歴史と今日の姿と将来は、部族民の隣人たちのそれと絡み合っているのである。

Courtesy Wilma Mankiller

チェロキー・ネイションの指導者、活動家のウィルマ・マンキラー

部族政府を、その土地基盤から見ると、数百万ヘクタールを管理するものから、25ヘクタール未満の土地を所有するものまで、さまざまである。人口についても、ナバホ族やチェロキー・ネイションなどのように25万人以上の登録構成員を持つ部族政府がある一方で、登録者数が100人未満のものもある。ただし主権を持つ部族政府は、その人口や土地基盤によって、享受できる自治権の度合いが決まるわけではないことを心に留めておかなければならない。ちょうど、小さなモナコ公国が、大国の中国や米国と同じ国際的権利を持っているように、土地基盤が小さく人口も少ない部族政府であっても、土地基盤が大きい、または人口の多い部族と同じ権限のある、主権を持った存在なのである。

21世紀に入ってしばらく経つが、先住民は数多くの重大な政治的、社会的、経済的、文化的課題に直面している。とりわけ重要な課題のひとつは、伝統的な知識体系や価値観を把握し、維持し、未来の世代に伝えていくための実用的なモデルを開発することであろう。部族の伝統的知識を真に理解することによってもたらされる、過去を引き継いでいるという感覚は、何にも代えがたいものである。確かに、先住民コミュニティの一部では、もともとあった言語や儀式、知識体系が回復不可能な状態にまで失われてしまっているが、その一方、多くの先住民コミュニティで、その文化が活気に満ち、その言語が話され、自然界や人間の生活の中の季節の変化を祝う、数百の儀式が執り行われている。先住民が、言語や薬草など伝統文化の個別的側面を保存するためのプロジェクトも、年々増加している。

先住民の将来を展望するには、その過去に目を向ける必要がある。先住民は、信じがたいほどの生命や土地、権利、資源を失いながら、粘り強く生き延びてきた。その粘り強さがあれば、今後どのような課題が待ち受けていようとも、それを乗り切るだけのものを持っていると言えるであろう。世界各地で、先住民はただ生き延びているというだけでなく、繁栄している。例えば、約4000万人の先住民がいる南米では、

ボリビアのエボ・モラレス大統領やノーベル平和賞を受賞したリゴベルタ・メンチュウのような明確なビジョンを持つ指導者が、文化的・政治的復興を先導している。

米国では、主に、部族政府が自治権・自決権回復を求めて尽力してきたおかげで、先住民にとってより明るい未来が開けているように見える。実際、自分たちのコミュニティや部族国家を再構築し、活性化しようとする部族政府や先住民たちの感動的な話も数多くある。

ハーバード大学は最近、10年以上にも及ぶ先住民族に関する包括的な研究を完了し、『先住部族国家の状況』（The State of Native Nations）という、慎重ながらも希望に満ちた本にまとめ出版した。この研究では、ほとんどの社会・経済指標が好ましい方向へ進んでいることが示され、多くの部族政府が力を持ち、教育達成レベルは向上し、また多くの部族コミュニティで文化の再興が起こりつつあるとしている。

先住民コミュニティでよく話し合われるのは、伝統的な先住民とは今は何を意味し、将来は何を意味するようになるのかということである。

21世紀の先住民であるということは、破滅的な貧困や抑圧に苦しみはしたものの、伝統的な物語や言語、儀式、文化の中に、慈悲や安らぎを感じる瞬間を数多く見出すことのできるコミュニティの一員であることを意味する。

21世紀の先住民であるということは、この地球について最も貴重で最も古い知識をある程度持っている集団、つまり、現在も大地と直接的な関係を持ち、大地に対して責任感を持っている民族の一員であることを意味する。

21世紀の先住民であるということは、自分の考えに改めて自信を持ち、自らの将来のビジョンを明確に言葉にするだけでなく、そのビジョンを実現するための人材と指導力を自分たちのコミュニティの中に持つことを意味する。

先住民であるということは、事情はどうであろうと、世界中の人々が先住民の人権と自決を支持する将来が来ると夢見ることができることを意味する。土地や資源を植民地化することはできても、夢まで植民地化することは決してできない。

21世紀の先住民であるということは、iPhoneやBlackBerry、Facebook、MySpace、YouTube、その他のあらゆる利用可能なテクノロジー・ツールを使って、世界中の先住民コミュニティとネットワークを築き、伝統知識やベストプラクティスを分かち合うことを意味する。

21世紀の先住民であるということは、起業家、医師、科学者であるということ、さらには、月面に足跡を残して地球に帰り、自分が属する民族が太古の昔から行っている儀式に参加する宇宙飛行士であることを意味する。

わたしは21世紀の先住民女性である。わたしは、わたしの祖先と同じように、わたしが属するコミュニティであるチェロキー・ネイションの構成員、血のつながった家族、そして自分が選んだ家族との一連の相互関係の中で、これまでの人生を送ってきた。

21世紀の先住民であるということは、その時々の状況がどのようなものであっても、将来に向けて確固としたビジョンを持ち続けた祖先たちに敬意を払うことを意味する。

先住民コミュニティでよく話し合われるのは、伝統的な先住民とは今は何を意味し、将来は何を意味するようになるのかということである。

21世紀の先住民であるということは、過去に受けた不当な行為を認識しながらも、それに対する怒りや現在直面している課題全体を前にして、気力をそがれて何もしない状態に自らが陥るのを許さないようにすることを意味する。

21世紀の先住民であるということは、わたしたちの親戚であり、涙でかすんだ目で未来を見るのは難しいことをわたしたちに思い起こさせるモホーク族の助言に心に留めることを意味する。

本稿に述べられている意見は、必ずしも米国政府の見解あるいは政策を反映するものではない。

ネイティブアメリカの生きている伝統

ガブリエル・タヤック

Courtesy National Museum of the American Indian, Smithsonian Institution

シセトン・スー族のビーズ細工を施した織物、1877 年頃。ガラスビーズ、羊毛との交易で得た布、木綿糸、毛糸が使われている。

歴史家ガブリエル・タヤックはワシントン DC にある国立アメリカインディアン博物館（NMAI）の学芸員である。タヤックは、チェサピーク湾地域に住んでいたピスカタウェイ族の子孫であり、祖父のターキー・タヤック首長（1895-1978）は、伝統療法による治療者であった。タヤックは本稿で、先住民族の歴史や文化を正確に描写することの重要性について述べている。

「大地とわたしの心はひとつである」

——ジョセフ首長

自らをニミプ（Nimipu、「人間」の意）と呼ぶネズパース族のうちの一団の人々を率いていたジョセフ首長（1840-1904）はその生涯のほとんどを、米国西部のゴールドラッシュに引き寄せられた白人入植者による侵略の真っただ中で過ごした。米国政府はネズパース族に対し、現在のオレゴン州、ワシントン州、アイダホ州を含めた彼らの本来の土地に、居留地を確保すると約束した。しかし、1863 年までに、ネズパース族の土地は 600 万エーカー（240 万ヘクタール）縮小され、本来の面積の 10 分の 1 になっていた。ジョセフ首長は不本意ながら居留地へ移ることを承諾したが、若い戦士たちが暴力で抵抗したため、ネズパース族は米国軍に追われることになった。ジョセフ首長は見事な戦略でこれに対抗したが、1877 年、ついに降伏を余儀なくされた。飢餓や寒さ、病のため、部族の人々が弱り切ってしまったためである。上に引用した言葉は、ジョセフ首長が降伏に当たって口にした言葉である。彼は、死ぬまで愛する故郷ワロア峡谷へ帰ることを許されなかった。今日、ニミプの人々は苦難を乗り切っただけでなく、漁業、林業、教育、商業を通じて、近代的な経済活動に参加している。ワシントン DC にある国立アメリカインディアン博物館（NMAI）で働くわれわれは、ジョセフ首長の物語と彼の大地に寄せる思いこそ、博物館を訪れる人々が最初に出会うべきものであると考えた。

先住民族の過去と現在の状況は、以下の 4 つの概念を念頭に置いて考えると、理解しやすくなる。まず、先住民族の文化は多様だが、人間は生き物の世界の管理者であるべきであるという共通のコンセプトで結ばれているということ。第 2 に、個人はそれぞれの属する部族コミュニティによって特徴付けられ、そのコミュニティに責任を負っていること。第 3 に、ヨーロッパからの入植者との破滅的な出会いから受けたトラウマが、わたしたち先住民の今日の状態を形作ってきたこと。そして最後に、過去と現在を通じて、先住民族の独創的な表現は、世界の文化や科学に貢献し続けているということである。

「ネイティブアメリカ」とは、NMAI の学芸員ポール・チャアト・スミス（コマンチ族）の言葉を借りて言えば、「古くて新しい、しかも常に変化している」世界であると理解される。

自分自身がアメリカインディアンである、あるいはアメリ

カインディアンの子孫である、と自認している人々は約400万人に上る。アメリカインディアンは米国各地に住んでおり、その70%は、条約により用意された居留地の外に住んでいる。アメリカインディアンは、人種的・民族的背景の異なる人と結婚しているケースが多く、米国の民族集団の中で異人種間結婚率が最も高い。先住民族は近年、特に各部族が持つ司法管轄上の自治権により許可されているカジノ経営から経済的利益を得ているが、いまだに他の米国人に比べ、健康状態が悪く、貧困率も高く、また学歴も低い者が多いままである。

アメリカインディアンの部族は極めて多様であり、それぞれが独自の伝統文化、言語、歴史、政府を持つ。ほとんどの先住民は、祖先から受け継いだ文化の維持と、ますますグローバル化が進む環境への参加のバランスを求めている。

Courtesy National Museum of the American Indian, Smithsonian Institution

歴史家ガブリエル・タヤック

アメリカ先住民は、社会に広がる差別や誤解のため、長年にわたって評価されず、その文化は滅びつつあると考えられていた。しかし、この30年間、さまざまな背景を持つ人々が力を合わせて取り組んだおかげで、自分の意見や考えを述べる機会が増え、各部族にも新しい活気が生まれつつある。2004年に開館したわたしたちの博物館NMAIも、そうした取り組みが実を結んだものである。NMAIは、連邦議会が1989年に定めた法律により設立され、80万点にも上る重要な民間のコレクションを、スミソニアン協会による公共の管理下に置いた。NMAIで最も重要なのは、先住民の歴史や基本的な考え方、そしてアイデンティティーについて、先住民が自らのために語り、世界の人々に説明するようにしている点であろう。

NMAIの存在は、先住民文化の評価に著しい変化が生まれていることを示している。この博物館の最も重要な役割は、先住民について、先住民の視点から、一般の人々を教育することである。大人たちの固定概念を変えるのは難しいが、わたしたちとしては、子どもたちが将来、先住民族に対する視点を形成する上でこの博物館が役立つことを心から期待している。わたしたちの博物館の主要な対象は、学校に通う子どもたちであり、博物館の教育部では、部族の学者と協力して、授業用の正確な教材を開発している。またほとんどの人々はこの博物館を訪れる機会がないと思われるので、芸術や科学のさまざまなテーマにおける先住民文化の多様性を学ぶことができるインターネットリソースも用意している。例えば、アメリカ文化について知識がある多くの人は、感謝祭という11月に特別なごちそうを食べる行事が、17世紀の、アメリカ先住民と清教徒入植者の平和的な交流から始まったことを知っているであろう。だが、感謝祭の元来の意図が、先住民たちが毎日行っている世界の豊かさに対する感謝、そして責任を表現する伝統的な儀式に基づくものであるということは、米国でもあまり知られていない。先住民には、季節ごとにさまざまな感謝祭があり、例えば北東部の部族は、毎年6月に「イチゴの感謝祭」の儀式を行っている。

生きる者の世界

「美をもってわたしは話す。だからわたしは心穏やか」
——ナバホ族の祈りの言葉

多様な先住民文化の奥深い教えは、しばしば、「原初の教訓」と呼ばれるが、その意味するところは、この世界における人間の生き方は、創造主またはその他の霊的な存在から人間に伝えられたものだということである。メキシコ以北のアメリカインディアンは、各部族がヨーロッパ式の書き方を取り入れるまで文字を持たなかったため、これらの概念は物語や歌、踊りに埋め込まれ、口述で伝えられてきた。ただし、先住民の哲学といったひとつの体系があるわけではなく、何百もの哲学が存在する。自然界や精霊界とバランスを保ちながら生きること、この世界における人間としての役割に敬意を払うこと、家族およびコミュニティとしての責任を進んで受け入れることが、今日の世界でわたしたち先住民を導く共通の文化的価値観である。

例えば、上にその祈りの言葉を引用したナバホ族は、自分たちのことをディネ（Dine、「人々」の意）と呼んでいる。アリゾナ、ニューメキシコ、ユタの州境を囲む乾燥地帯にある700万ヘクタール（2万6000平方マイル）にも及ぶ居留地に住んでいる。現在、その人口は30万人で、米国の先住民部族としては最大。ディネは伝統的に、羊を飼ったり機織りをしたりして暮らしていたが、今では世界中の全ての大陸でありとあらゆる職業に就いている。ディネの哲学の中核的

な理念をホジョ（hozho）といい、英語では簡単に「美」と訳されている。しかし、ホジョという理念はもっと複雑で、完全性、バランス、復興といった価値観を表している。多くのディネの祭事や慣習は、個人やコミュニティや世界における調和を回復するために行われる。従って、ある人が、「美をもってわたしは話す」と言う場合、それはもっと複雑な観念――自分の考えは、何かを修復するもの、全体論的なもの、そしてバランスの取れたものであるべきであるということ――を言い表しているのである。この数十年、ディネは教育及び統治システムの管理を自分たちの手に取り戻してきているが、その過程で、この哲学を学校、法廷、経済をどのように導くかの指針として取り入れてきた。

先住民族の哲学は豊かで多様である。さまざまな背景を持つ人々が、現代にも通用するこれらの古い思想体系について学びたいと思っている。しかし、不運なことに、米国の歴史の大部分において、先住民族の宗教や哲学は、良くて誤解され、最悪の場合には禁止されてきた。現在、多くの先住部族が、失われた伝統を取り戻し、今も受け継いでいる伝統を後世に残そうと、懸命に努力している。

自然界や精霊界とバランスを保ちながら生きること、この世界における人間としての役割に敬意を払うこと、家族およびコミュニティとしての責任を進んで受け入れることが、今日の世界でわたしたち先住民を導く共通の文化的価値観である。

コミュニティ

「インディアンであるということは、一部分しかない不完全な何かであるということではなく、何かの一部分であるということである」

――アンジェラ・ゴンザレス、2007 年

アメリカ先住民のアイデンティティーの中核となるのは人間関係である。彼らは、家族のほとんどが主に親と子どもで構成される核家族である現代の米国において、より広義の家族観を持っている場合が多い。アメリカインディアンの文化では、血縁者だけでなく、一族あるいは生活共同体の関係者も家族に含まれる。また部族の構成員であるということも、アイデンティティーを決める重要な要素であるが、その部族の構成員として認められるかどうかは、どの程度インディアンの血を引いているか、すなわちインディアンの血の量「ブラッド・クアンタム」（blood quantum）によって決まる。アメリカインディアンであることは、単に、より広い意味での民族・人種集団に属しているというだけでなく、その構成員であるための資格が定義されている特定のコミュニティに属しているということである。母親の家系をたどる部族もあれば、父親の家系をたどる部族もあるし、また 20 世紀初頭に米国政府によって定められた基準を採用している部族もある。部族によってそれぞれ独自の定義を持っている。

アメリカ先住民とアフリカ系米国人は、ともに差別的な人種政策の対象であったため、かなりの共通点がある。アメリカ先住民もアフリカ系米国人も、何世紀にもわたって、多くのヨーロッパ系米国人に比べて生物学的にも文化的にも劣っていると見られていた。白人が彼らと結婚することを禁じる法律があり、アフリカ系米国人に対してより厳しく執行された。興味深いことに、アメリカ先住民もアフリカ系の人々も先住民特有の生活様式を持っていたため、最初に出会ったときから、心を通じ合わせることができた。植民地時代初期には、大西洋沿岸地域で、彼らの間の異人種間結婚が数多く見られた。また彼らの差別撤廃を目指す取り組みにもつながりがあった。1960 年代の公民権運動の影響を受け、多数のアメリカ先住民が、自らの権利回復のための社会運動を始めた。アメリカインディアンとは何かということは、おそらく、彼ら自身の間で最もよく取り上げられる話題のひとつであろう。部族コミュニティに対する義務を果たしながら、急速に変化するグローバル化の時代に生きるという葛藤の中で、多くのアメリカインディアンは、自分たちが常に「2 つの世界」を何とか両立させようとしていると感じている。しかし、アメリカインディアン文化の価値をめぐる政策や社会態度の変化に伴い、若い世代のアメリカ先住民の間には、どんな環境にも適応できる部族としてのアイデンティティーを持った全体的な人間として、自分たちは「ひとつの世界」に生きているのだという考え方を追求する人々も出てきている。

表現

「考えるという伝統が、インディアン流のやり方である」

――ジョン・モホーク、1990 年頃

先住民文化は、多様な輝きを放っている。古代における農業技術の革新、現代アート、入植者と接触する以前の統治概念、環境保全の伝統などから、先住民の創造的才能を窺い知ることができる。先住民族は現在、部族としてのアイデンティティーと今日の世界の現実を結び付けようとしており、彼らが世界に対して貢献できることは多い。

本稿に述べられている意見は、必ずしも米国政府の見解あるいは政策を反映するものではない。

わたしの場所、わたしのアイデンティティー

アンガユクアーク・オスカー・カワグリー

アンガユクアーク・オスカー・カワグリーは、アラスカ大学のフェアバンクス校に勤める教育学名誉教授。長年にわたり、生物科学に関心を寄せてきた。アラスカ先住民であるユピック族の家庭に生まれ、両親の死後、2 歳の時から祖母に育てられた。祖母がユピック語しか話せなかったため、ユピック語が彼の第 1 言語、ユピック文化が彼の第 1 文化となった。ユピック族は、しばしばエスキモーと称される北極地方の部族のひとつである。カワグリーは、科学、教育、保健の分野を中心に非営利で活動する数団体の事務局長を務めた。現在は、ハスケル大学の「アメリカインディアン及びアラスカ先住民気候変動対策グループ」のメンバーである。

© AP Images/Al Grillo

浸食被害を受けたニュートク村。住民は、気候変動の影響に適応する最善の方法について、村の長老や地質学者に助言を求めている。

わたしは先日、「アラスカはあなたのもの」というタイトルのテレビ番組を見た。わたしはまず、これは政治的・経済的な関心をそそるために使われた表現だ、と感じた。しかし、考えれば考えるほど、この表現は、わたしの持つ世界観と不協和音を奏でるのであった。一体どうやって、誰かがアラスカを「所有する」ことなどできるというのであろうか。わたしの祖先代々の言い伝えでは、大地がわたしを所有しているのだ。こうして、わたしは自分のユピック族としての世界観が、現在の支配的社会のそれとどう違っているかを考え始めた。

わたしの場所を特徴づけているのは、その寒さである。マムテリレク（Mamterilleq、現在のアラスカ州ベセル）が、わたしを現在のわたしに育てた。その寒さがわたしの言語、わたしの世界観、わたしの文化、そしてテクノロジーを作った。しかし、今や寒さは急速に弱まっており、その結果、辺りの風景が変化しつつある。風景の変化は、ユピック族や、その他の先住民の心象風景を混乱させ、さらに、生まれつき母なる自然の摂理を読み取る者たちと動植物相との歯車がうまくかみ合わなくなってきている。

クスコクウィム川沿いに住むわたしたちユピック族は、ハンノキが葉を出すのを見て、スメルトという小魚がいつ川を上ってきてたも網ですくえるようになるかを判断していた。またハンノキの芽から葉が出始めるとキングサーモンがやってくる、などということも分かった。しかし、春が来るのが平年よりも 2 週間から 4 週間も早くなると、こうした指標はもはや当てにはできない。これは、ユーコン・クスコクウィム・デルタ地帯に起きている変化のほんの一例である。

風景とアイデンティティー

かつては、わたしたちを取り巻く風景がわたしたちの心象風景を形成し、それがわたしたちのアイデンティティーを作り上げていた。わたしは母なる自然の切り離すことのできない一部として育った。わたしは大地を「所有」したり、人間であるわたしよりも強い力を持つことの多い植物や動物を栽培したり飼育したりする立場になかった。

わたしたちは、母なる自然には文化があることを知っている。そして、それが先住民文化なのである。

だから、わたしたち民族は先住民族のひとつとして、母なる自然を見習わなければならない。わたしたちは、エラム・ユア（Ellam Yua）と呼ばれる万物を司る存在または精霊が、母なる自然の中に住んでいることを知っている。だから、自

然はわたしたちのガイドであり、教師であり、そして指導者なのである。

この「大いなる意識」に親しむためには、自然の中でかなりの時間を過ごす必要がある。そうすることで、先住民は心の落ち着きを得る。母なる自然はわたしたちに利他的であれと促す。すなわち、植物や動物を含め、わたしたちの周囲にあるすべての物、そして母なる大地のすべての要素――風、川、湖、山、雲、星、天の川、太陽、月、潮の流れ――に最大限の敬意を払うようにと促すのである。わたしは、知っていなくてはいけないこと、問題を解決するために必要なことはすべて、母なる大地から学んだ。しかし、時代は変わり、大地と共に生きることは以前より難しくなっている。

最初にわたしたちに強い影響を与えたのは、キリスト教伝道者と教育制度である。19 世紀の終わりから 20 世紀初頭にかけて、米国政府と契約を結んだキリスト教の教会によって、ユピック族の社会に学校が導入された。

アラスカ先住民の若者を対象に、寄宿学校が設立された。そこで行われた教育は、先住民を技術・機械論的で消費者主義的な世界観に同化させるよう体系化されおり、先住民の言語や文化を抑圧し虐げるものだった。この頃までに米国は、アメリカインディアンを対象とする寄宿学校を極めて巧妙に設立・運営できるようになっていた。先住民の子どもたちは、両親と故郷の村から長期間にわたって引き離された。そして、たとえ村に戻って来ても、そこでの生活になじむことはできなかった。

こうした子どもたちの欲求や願望はもはや、村の生活とは相いれないものになっていた。同化教育の効果は極めて大きく、ほとんどの先住民の若者が先住民としての自らの特性を抑え込もうとするようになったのである。

© Courtesy Angayuqaq Oscar Kawagley, photo by Sean Topkok

アンガユクアーク・オスカー・カワグリー。ユピック族長老で、アラスカ大学フェアバンクス校名誉教授

1960 年代末から今日まで、先住民の人々は自分たちの言語や世界観、文化、技術を子どもたちに教えることができるよう、教育を変える努力をこつこつと続けてきた。これは、先住民の村にとって、時間をかけた癒しのプロセスである。教育におけるわたしたちの使命は、自分たちの場所、自分たちの環境、自分たちの世界でくつろぎを感じる人間を育てることである。この目標に向けた先住民の努力は、同じ考えを持つ人々からの支援により、ゆっくりとではあるが、実を結びつつある。

伝統的な知恵と科学の融合

ユピック族は、子どもたちの教育システムの再構築を積極的に進めてきたが、最近では、気候変動が及ぼす影響についても同様に積極的に取り組んでいる。祖先が過去においてどのように気候変動に対処してきたかに注目し、そこで学んだことを現在に応用している。何かできそうだと思えば、計画を練り、技術者、水文学者、地理学者のほか、先住民に最適な助言を与えることのできる知識や技能を持ったさまざまな分野の専門家に、技術的な援助を求めるのである。

例えば、ニュートク村は大規模な土地の浸食に悩まされており、村民が中心となって村全体の移転計画を進めている。村民自身が資金の調達方法を探し、移転候補地の視察を行い、自分たちの選択が正しいかどうか、村の長老や地質学者の意見を仰ぐ。これは、村が立案や準備を主導する村ぐるみの移転計画であり、住宅、飛行場、井戸、その他の施設がすべて新しい場所に移ることになっている。

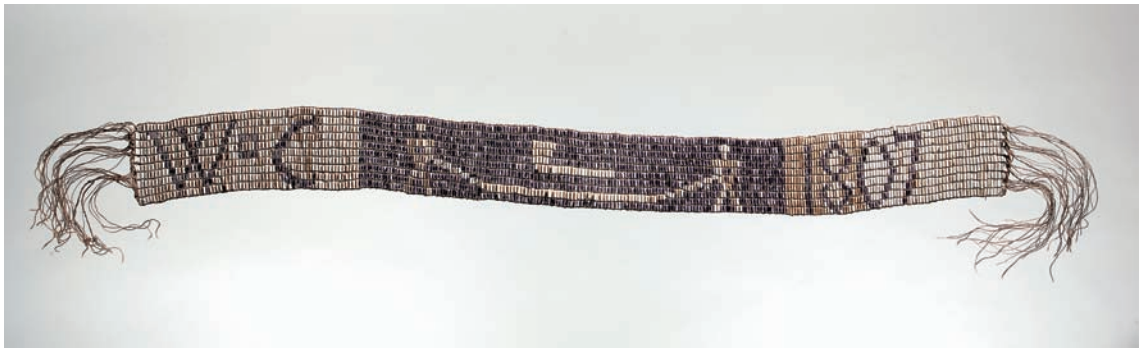
ユピック族は、サケの産卵域の環境整備にも積極的である。彼らは州政府の漁業専門担当者と定期的に会合を持ち、自分たちが懸念している事柄を伝えるとともに、技術的な支援が必要な問題の解決に努めている。

先住民の人々は、知識を得たり物事を実行したりする伝統的方法にとって、さまざまな科学分野から学ぶものがあり、その支援を受けることが自分たちの計画や取り組みを強化するということを、十分理解している。この 2 つの知識を得る方法が結び付けばさらに強力な方法が生まれ、うまくいけば、物事をより正しい形で遂行するのに役立つだろう。「アラスカはあなたのもの」という表現に見られるような世界観の歴史的対立が、わたしたちが共に今日直面している多くの課題に対する新たな理解と解決方法を導き出す力になるとすれば、それはこうした協力を通じてである。

本稿に述べられている意見は、必ずしも米国政府の見解あるいは政策を反映するものではない。

アメリカ先住民の統治理念と合衆国憲法

ブルース・E・ジョハンセン



Courtesy National Museum of the American Indian, Smithsonian Institution

ワムパム・ベルト。ナラガンセット族の言葉で「ワムパム」と呼ばれる白い貝殻ビーズを紐に通したり織り込んだりしてベルトにしたもの。イロコイ族は、歴史を記録したり契約を締結したりするため、また特別な出来事を記念したりギフトとして贈呈するためにこれを使っていた。写真のベルトは、西部オジブウェ族の首長がイギリス国王ジョージ３世を訪問したことを記録していると考えられる。

ブルース・E・ジョハンセンは、ネブラスカ大学オマハ校コミュニケーション学部のフレデリック・W・カイザー研究教授である。ドナルド・A・グリンデ・ジュニアと共同で、アメリカ先住民の統治慣行が合衆国憲法に与えた重要な影響について、先駆的な研究を行った。研究結果は、かつて論議を呼んだこともあるが、現在では広く受け入れられている。

合衆国政府の形成には、よく知られているヨーロッパの先例――とりわけ、ギリシャやローマの法律およびイギリスのコモン・ロー――に加え、アメリカ先住民の民主主義の理念が大きな影響を与えている。自由を求めて植民地アメリカにやって来た移民は、それをイロコイ族などのアメリカ先住民の先住部族国家の連合体の中に見出した。こうした考え方は、ベンジャミン・フランクリン、トマス・ジェファソンおよびジョン・アダムズのかかわった議論の中ではっきり示されているように、憲法制定会議が開かれた1787年までに、旧植民地ですでに広く通用していた。その後、19世紀には、イロコイ族の男女の性差の関係に関する概念が、米国フェミニズムの主な創始者たちに重要な影響を及ぼした。これらの考え方を頭に入れておくと、今日行われている政治的な議論が理解しやすくなる。

先住部族国家は、ヨーロッパからやってきた移民と遭遇したときには、北米大陸の東部全域においてすでにいくつもの連合体を形成していた。現在のフロリダ州にはセミノール族、両カロライナ州にはチェロキー・ネイションとチョクトー族、ニューヨーク州北部とセントローレンスバレーにはイロコイ族とその同盟部族であるワイアンドット（ヒューロン）族の国家があった。

入植者たちにはイロコイ族の連合制度が最もよく知られていたが、それは、イロコイ族がイギリス人とフランス人との間だけでなく、他の先住部族の連合体の間でも、外交的に極めて重要な立場を占めていたことが大きな理由である。フランス人からは「イロコイ」と呼ばれ、イギリス人からは「5つ（後に6つ）の国」と呼ばれたイロコイ族は、自分たちをホーデノショーニー（Haudenosaunee）、すなわち「ロングハウスの民」と呼び、東部沿岸地域のイギリス植民地とセントローレンスバレーのフランス植民地の間にある唯一の比較的平坦な一帯を支配していた。

イロコイ連邦は、ホーデノショーニーの口頭伝承で「ピースメーカー」として知られるヒューロン族の指導者デガナウィダが、血で血を洗う抗争を抑え自分が考える連合体のビジョンを広めようと、アヨンワサ（時にハイアワサと呼ばれる）の助けを借りて結成した。当初、イロコイ連邦は、モホーク族、オネイダ族、オノンダガ族、カユガ族、セネカ族の5部族で構成されていた。18世紀初頭にタスカローラ族がイロコイ族の土地に移住してきて、6番目の部族国家として認められた。トレド大学のバーバラ・A・マンとジェリー・フィールズの研究によると、イロコイ連邦の歴史は、西暦12世紀までさかのぼると考えられる。

ホーデノショーニーの基本法である「大いなる平和の法」は、今日に至るまで、サチェム（部族長）は部族構成員の非難に耐えるために神経がずぶとくなければならないと定めている。すなわち、サチェムは、統治に関する行為を人々から事細かに調べられても腹を立てないよう努力しなければならないのである。こうした考え方は、トマス・ジェファソンや

ベンジャミン・フランクリンの著作にしばしば見られるが、米国の法律に完全に成文化されるのは、公務員が名誉毀損で訴訟を起こし勝訴することを実質的に不可能にした最高裁判所の「ニューヨーク・タイムズ社対サリバン」判決が出された1964年のことである。

また「大いなる平和の法」は、職務をもはや適切に遂行できなくなった指導者を解任することできると規定しているが、これは米国で20世紀後半に採択された、職務不能に陥った大統領の解任について定めた憲法修正条項と非常によく似ている。「大いなる法」には、信教の自由、および「大協議会」(Grand Council) で賠償請求を行う権利を保障する規定も含まれている。さらに、他人の住居に無許可で侵入することも禁じている。これらの措置はすべて、権利章典を通じて米国市民にはなじみ深いものばかりである。

イロコイ連邦の議事手続きは、「兄」と呼ばれるモホーク族とセネカ族の間の討議で始まる。「東の扉の守り手」(モホーク族) と「西の扉を守り手」(セネカ族) による討議の後、問題は「たき火越し」に、「弟」であるオネイダ族とカユガ族の指導者たちに諮られ、議論が行われる。オネイダ族とカユガ族の間で合意が成立すると、モホーク族とセネカ族が再度協議して、内容を確認する。問題は、最後にオノンダガ族に示され、オノンダガ族は残っている対立点の解消に努める。

オノンダガ族はこの段階で、司法審査に似た権限や、米国議会の両院協議会に組み込まれている機能に似た権限を行使する。オノンダガ族は、提案が「大いなる法」に反すると判断した場合、その提案に対し異議を唱えることができる。基本的に、大協議会は法案をイロコイ憲法に矛盾しないように書き直すことができる。オノンダガ族が合意に達すると、大協議会の「タドダホ (Tadodaho)」(最高執行責任者) がその決定を承認する。このプロセスは、チェック・アンド・バランス、公開討論そして意見の一致を重視していることを反映している。このような議事手続きが全体として目指すところは、各段階において結束を促進することである。

イロコイ族と植民地連合

1744年、ペンシルベニア州ランカスターでイロコイ族のタドダホであるカナッサテゴは植民地の代表者らへの助言として、イロコイ族の考える結束の概念を次のように説明した。

われわれの賢明なる祖先は、「5つの国」の間に団結と友好を築いた。これがわれわれを屈強にし、近隣諸部族に対する重みと権威を与えてくれた。われわれは強力な連邦である。あなた方がわれわれの賢明なる祖先に倣って同じ方法を取るならば、同じような強さと力を得ることができるだろう。それゆえ、何が起ころうと、互いに争うことは決してすべきではない。

ベンジャミン・フランクリンが、入植者たちへのカナッサテゴの助言を初めて知ったのは、おそらく、彼がサチェムたちの言葉を活字にしたときだっただろう。フランクリンは、自分でインディアン条約を小冊子にして出版したが、この小冊子は1736年から1762年にかけて各植民地で大変よく売れた。植民地統合を目指す最初の試みとなったオルバニー会議の開催前に、フランクリンはすでにカナッサテゴの言葉について考えていた。1751年、フランクリンは、イロコイ族の団結の例を挙げ、気の進まない入植者たちを恥じ入らせて何らかの形の植民地連合を成立させようとし、次のような大げさな人種差別的発言を行った。「無知な野蛮人の6つの国があのような連合体を形成することができ、長きにわたってそれを維持し、揺るぎないものとしているのに対して、10か12のイギリス植民地が同様の連合体を形成できない (中略) というのはおかしなことだ。われわれの方がずっと連合体を

トウモロコシを収穫する先住民の人々。水彩絵の具を薄く塗った手彩色の木版画

© North Wind Picture Archives

必要としており、利点も多いに違いないというのに」 実際は、後の証拠からも明らかなように、フランクリンはイロコイ族に対し少なからぬ尊敬の念を抱いていた。フランクリンは植民地連合の強力な提唱者となり、ペンシルベニアの代表としてイロコイ族およびその同盟諸族との条約会議に参加したことで、傑出した外交官としてのキャリアを開始した。

1754 年 7 月 10 日、フランクリンは「連合案」を正式にオルバニー会議に提出した。フランクリンは、オルバニー連合案についての協議は、「（前略）毎日、インディアン問題と並行して進められた」と書いている。イロコイ族のサチェムであるティヤノガは、オルバニー会議に出席していた約 200 人のインディアンを代表して発言したばかりでなく、カナッサテゴが 10 年前に行ったように、植民地の代議員らにイロコイ連邦の政治制度を概説した。

植民地統合に向けたオルバニー連合案の最終草案を書き上げるに当たって、フランクリンはいくつかの外交上の要求――支配を求めるイギリス側、緩やかな連邦制によって自治権を維持したい植民地側、形態と機能において自分たちと似た植民地の連邦を求めるイロコイ側――に応えようとしていた。イギリスを満足させるために、連合案では、イギリスが任命した最高長官による統治を行うこととした。各植民地は、連合案によって制限されない限り、それぞれの憲法を維持することが許される。各植民地内での内部主権の維持は、イロコイ連邦の制度と極めて似ており、ヨーロッパには前例がなかった。

各植民地内での内部主権の維持は、イロコイ連邦の制度と極めて似ており、ヨーロッパには前例がなかった。

トマス・ジェファソンとアメリカ先住民の統治概念

フランクリンもジェファソンも現実をよくわきまえていたので、「自然状態」（注：政治体としての国家のできる以前の、基礎的人権（＝自然権）が保障されている状態を指す、政治哲学上の用語）を模倣することができるとは考えなかったものの、その概念は、米国の国家としてのイデオロギー構造に早くから盛り込まれていた。ジェファソンは、次のように書いている。「わたしの意見では、地上で唯一われわれの状態と比較し得るのは、われわれより少ない法で成り立つインディアンの状態である」 トマス・ペインは、大きな影響を及ぼした政治パンフレット『コモン・センス』（Common Sense）の第 1 ページに「政府は、衣服がそうであるように、原罪の印である」と書いて、アメリカ先住民社会についての観察結果を要約している。

ジェファソンは、1787 年、エドワード・キャリントンに宛てた書簡で、表現の自由を世論と幸福に結び付け、アメリカ先住民社会を一例として挙げている。

われわれの政府の基盤は民意にあり、その権利を守ることがわれわれの最も優先すべき目的だ。新聞のない政府と政府のない新聞のどちらを選ぶかという決定をわたしに任せてくれるとしたら、わたしは一瞬の迷いもなく後者を選ぶだろう。（中略）わたしは、概して、政府を持たない社会に生きている（インディアンのような）人々の方が、ヨーロッパの諸政府の下で生きている人々よりもはるかに幸福を享受していると確信している。

ここで言う「政府を持たない」は、ジェファソンにとって、社会秩序の欠如を意味していたはずがない。ジェファソンだけでなく、フランクリンもペインも、アメリカ先住民社会を知り尽くしていたので、先住民が社会的結束なしに機能しているとあえて述べることはなかった。例えば、イロコイ族は、北米北東部に広がる同盟諸族との連邦制を「政府を持たず」に組織していたのではないことは明らかだった。イロコイ族は、ヨーロッパの概念とは違う政府を持って、連邦制を組織していたのだ。ジェファソン、ペインおよびフランクリンは、イロコイ族の政府について研究し、高く評価し、革命期の米国の設計図に「自然法」と「自然権」を盛り込もうとした。

憲法制定会議での連邦主義に関する議論

1787 年 6 月までに、憲法制定会議の代議員は、連合の基本的性格についてすでに討議していた。多くの代議員は、1787 年 6 月 1 日にジェームズ・ウィルソンが行った「この国（中略）に適用できない英国モデルには支配されたくない」という発言に賛同したようだ。ウィルソンは、アメリカがあまりにも広く、その理想があまりにも「共和主義的なので、大規模な連邦共和国しか適さない」と考えていた。

1787 年、ジョン・アダムズは、憲法制定会議の直前に自著『合衆国政府憲法擁護論』（A Defence of the Constitutions of Government of the United States of America）を発表した。アダムズはマサチューセッツ州代表として憲法制定会議の代議員に選出されたにもかかわらず、会議に出席せず、代わりにこの長い論文を発表した。アダムズの『擁護論』は、世界の諸政府を批判的に概観したもので、イロコイ族や他のアメリカ先住民の政府だけでなく、ヨーロッパやアジアの連邦制に関する歴史的実例も記されていた。

アダムズの『擁護論』は、決して、アメリカ先住民型の政

府を手放しで推奨するものではなかった。アダムズは、オルバニー連合案と連合規約のひな型となったイロコイ連邦の「大協議会」に近い一院制の立法府の採用を提唱するフランクリンの主張に異議を唱えた。アダムズは、イロコイ連邦で機能しているように見えるコンセンサス型の統治を信用しなかった。二院制に組み込まれたチェック・アンド・バランスの機能がないと、制度は特定の利益団体に屈し、無政府状態か専制政治に陥ると考えたのだ。アダムズは、モホーク族の独立性について述べたくだりでこうした批判を展開しているが、一方フランクリンはインディアンの部族政府について、アダムズよりもずっと肯定的に記述している。

アメリカ先住民の考え方と米国フェミニズムの原点

17、18 世紀を通じて、ヨーロッパ人やヨーロッパ系アメリカ人の観察者たち――その大部分が男性だった――の興味をそそり、困惑させ、時には警戒心を抱かせたアメリカ先住民の生活の一面は、女性の果たす役割が大きいことだった。多くの場合、女性は先住民の政治制度において中心的な地位を占めている。例えば、イロコイ族の女性は、指導者となる男性を推薦し彼らが不正を働けば、「角を抜く」、つまり、弾劾することができる。女性は、男性が立てた戦争計画に対し、しばしば拒否権を発動する。母系社会――植民地と境を接するほとんどすべての先住民連邦は母系社会であった――では、女性は男たちの衣服、武器、狩猟道具を除くすべての家財を所有した。女性はまた、世代から世代へと文化を継承する役割の主要な担い手でもあった。

イロコイ族社会の女性の役割は、近代の米国において最も影響力を持った一部のフェミニズム提唱者たちに勇気を与えた

イロコイ族社会の女性の役割は、近代の米国において最も影響力を持った一部のフェミニズム提唱者たちに勇気を与えた。

サリー・R・ワグナーが「フェミニズムの第一の波」と呼ぶ、1893 年に出版されたマチルダ・ジョスリン・ゲイジの独創性に富んだ著作『女性、教会および国家』（Woman, Church, and State）においても、イロコイ族の実例は重要なものとして挙げられている。ワグナーの研究によれば、ゲイジは同書の中で「現代社会は、生得の権利、生まれながらにして持つ条件の平等およびこれに基づく文明的な政府の樹立という最初の構想を（イロコイ族に）負っている」と認めている。

ゲイジは、エリザベス・ケイディ・スタントンおよびスーザン・B・アンソニーと並んで、19 世紀の米国で最も影響力のあった 3 人のフェミニストの一人であった。ゲイジ自身、イロコイ族の婦人協議会への入会を認められ、「オオカミのクラン」の一員として「空を支える女」を意味するカロニエンハウィという名前を与えられた。

本稿に述べられている意見は、必ずしも米国政府の見解あるいは政策を反映するものではない。

歴史家ブルース・E・ジョハンセン

Courtesy Bruce E. Johansen, photo by Michelle Bishop

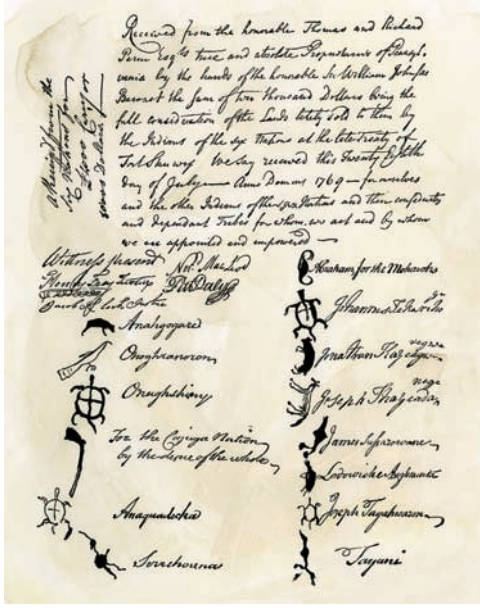
振り子のように揺れるインディアン政策

ジェイス・ウィーバー

ジェイス・ウィーバーは、ジョージア州アセンズにあるジョージア大学の宗教・アメリカ先住民研究フランクリン記念教授、法学教授、およびアメリカ先住民研究所所長。政治学、神学および法学の学位を取得したウィーバーの研究は、複数の専門領域にまたがっている。これまでに 9 冊の本を執筆・編集し、現在、妻のローラ・アダムズ・ウィーバーと共にチェロキー・ネイションの強制移住に関する本を執筆中。インディアンの視点から歴史を描いた2009年のPBSドキュメンタリー・シリーズ「わたしたちはとどまり続ける」(We Shall Remain)の第 3 話「涙の旅路」(Trail of Tears) のアドバイザーを務めた。ウィーバーはチェロキー・ネイションの血を引いている。

1969年11月21日、テレビで夜のニュースを見ていた米国人のほとんどは、インディアンがサンフランシスコ湾に浮かぶアルカトラズ島で、当時すでに閉鎖されていた連邦刑務所を占拠したことを知って衝撃を受けた。その頃にはテレビで抗議行動を目にすることには慣れていた米国人は、過激な行動主義に驚いたというより、インディアンがまだ存在していたことに驚いた。多くの米国人にとって、時代が19世紀から20世紀に移ってからは、インディアン（アメリカ先住民）は一度も姿を現すことのなかった存在であった。米国人は、1890年にインディアン戦争の終結が宣言されたことでインディアンの存在を忘れていたのである。

平均的な米国人ならインディアンの存在を知らなくても許されるだろう。メディアは、米国の先住民に関する問題をほとんど取り上げなかった。ヘンリー・ルースが特別変わっていたのではない。雑誌タイムやライフを発行する有力者であったルースは、「米国内のいかなる場所におけるインディアンについても記事を掲載しないという、絶対的に破ることはできなそうに見える方針」を持っていた。ルースは現代のアメリカ先住民を「いかさま師」と考えていた、とアルビン・ジョセフィーは『ニューイングランド南部のピクォート族：あるアメリカインディアン国家の崩壊と台頭』(The Pequots in Southern New England：The Fall and Rise of an American Indian Nation, 1990）に収録された「ニューイングランドのインディアン：当時および現在」(New England Indians：Then and Now）の中で述べている。



© North Wind Picture Archives

スタンウィックス砦条約（1789）でイギリスに割譲された土地に対し、イロコイ族の指導者たちになされた支払いの受領書の署名ページ。入植者と先住民部族との間の法的関係を定めた数多くの文書のひとつ。部族指導者たちは、自分たちのトーテムである動物を記すことにより署名した。

アルカトラズ島を占拠したインディアンは、1868年のララミー砦条約――オグララ・ラコタ族の部族長レッド・クラウドの米国に対する戦争を終結させた条約――によって、アメリカ先住民は連邦政府の余剰資産を要求することを認められているという漠然とした考え方に基づいて、行動を起こしたのであった。彼らはこの島を19ヵ月間占拠した。似たような占拠事件や抗議行動がその後いくつか起きたが、これはその最初だった。

これらの出来事は、現代のアメリカ先住民の存在を一般国民に気付かせただけでなく、権力の中枢にある人々からも注目された。1970年 7 月、リチャード・ニクソン大統領（在任 1969-1974 年）は、米国議会への特別教書の中で、インディアン政策の新しい方向、すなわち「自決」(Self-Determination）政策を発表した。インディアン部族は、自分たちの事は自分たちで管理するよう奨励されることになった。この政策は、それ以前25年間にわたって続いた「連邦管理終結」(Termination）政策――インディアンの主権国家、部族の法律および土地管理の承認を取り消す政策――に代わるものであった。州政府および連邦政府は、同化政策と法律制定を通して、数々の条約によって定められたインディアン部族と政府との特別な関係に終止符を打ち、実質的に、独自の先住民文化としてのインディアンの存在を記録から抹消しようとした。

実際、過去233年間、この国の「原住民」に対する政府の方針は、その文化の存続奨励策と積極的同化策の間で振り子のように揺れてきた。ある時代に一方の政策が取られると、次の時代にはもう一方の政策に取って代わられるということが繰り返されたが、いずれの場合も、その目的は「インディ

アン問題」の解決であった。政策立案者にとっての問題とは、インディアンの人々とその部族の特別な地位、すなわち、（法律および政策が概して米国と似ている）カナダで言うところの「市民権プラス」であった。インディアン部族は、連邦制度の中で別個の主権を持つ存在である。彼らは「国家の中の国家」であり、その地位は条約および合衆国憲法により認められている。従って、連邦政府が承認する部族の構成員は、米国および自らが属する先住部族国家の二重市民権を持っている。これまでほぼ政策転換の度に、議員たちは連邦政府が「インディアン問題」から手を引く道を探ってきた。

インディアンに対する権限

実のところ、インディアン政策およびアメリカ先住民の地位について理解するには、まず植民地時代以前にさかのぼらなければならない。フレンチ・インディアン戦争が1763年に終わった後、フランスはニューフランス（カナダ、およびミシシッピ川といわゆる東部山岳地帯との間に挟まれた土地）を英国に割譲した。新たに獲得した領土に安定を回復するため、英国のジョージ 3 世は国王宣言を発した。そこには、個人も植民地もインディアンから土地を購入または取得してはならないと定められていた。この国王宣言によって、英国政府だけがインディアンから土地を取得できることになり、取得する方法はただひとつ、すなわち条約によってインディアン部族に土地を割譲させる方法だった。またこの国王宣言では、北米大陸に「白人植民地の恒久的な境界線」を確立しようとした。英国の13植民地に対するその境界線はアパラチア山脈とされたが、その区分は設定される前にすでに侵犯されていた。

アメリカ独立戦争（1775-1783）後は、合衆国が英国の後を継いだ。合衆国憲法（第 1 章第 8 条）は、議会に「インディアン部族との通商を統制する」権限を与えた。やがて、これは、インディアンに対する独占的かつ全面的な権限を連邦政府に与えるものと解釈されるようになっていった。議会は1790年、国王宣言とよく似た「インディアン通商禁止法」を可決した。ジョージ・ワシントンは、大統領就任前に、その方針と実用性について次のように書いている。

インディアンを武力で彼らの国から追い出そうとするよりは、むしろ彼らの土地を購入する方が適切である。われわれがこれまで経験してきたように、森の野獣は追い出しても追跡が終わると間もなく戻ってきて残っている者を襲うことがあるが、それと同じようなことになる。われわれの入植地が次第に拡大していくと、確実に、野蛮人は狼と同じように退去せざるを得なくなるだろう。両者は形こそ違うが、どちらも猛獣だから」（フランシス・ポール・プルチャ編『米国のインディン政策文献集』（Documents of United States Indian Policy, 1990）の中で引用されている、ジョージ・ワシントンのジェームズ・デュアン宛ての1783年 9 月 7 日の書簡）。

ワシントンは大統領（在任1789-1797年）として、現地での同化、すなわちインディアンを「文明化」し、その居住地域で新しい国家に組み込む政策を遂行した。

ワシントンのこの考え方は、その後40年にわたって公式の方針となったが、トマス・ジェファソンが大統領（在任1801-1809年）に就任した頃に、変化の兆候が表れた。ジェファソンは、ワシントンの方針を踏襲しながらも新しい方針をほのめかし、次のように書いている。「われわれの入植地は次第にインディアンを囲み、接近していき、彼らはやがて、合衆国の市民としてわれわれと合体するか、ミシシッピ川の向こうに移動するだろう。前者は確かに彼らの歴史の終焉を意味するが、それが彼らにとっては最も幸福なことである」（ウィリアム・ヘンリー・ハリソンに宛てた1803年 2 月27日付の書簡）。「ルイジアナ購入」後、ジェファソンは、ミシシッピ川を北米大陸における白人入植地の新しい恒久的境界線にすることさえ示唆した。ジェファソンは、すぐにこの考えを撤回したものの、その後、インディアンの西部移住は、公然と論じられるようになり、ますます避けられないものとなった。1830年、議会は「インディアン強制移住法」を可決した。1831年から1839年までに、いわゆる「文明化 5 部族」と呼ばれた南東部の主な部族は、インディアン・テリトリー（現在のオクラホマ州）へ移住させられた。移住は、白人入植地にとっての障害を取り除くために実施されたものであったが、それだけでなく、先住部族国家が合衆国の外で自らの政府と文化を維持できるようにするためでもあった。

移住を支持する声が徐々に減っていったのは、「涙の旅路」として知られるようになった、西部へ向かうチェロキー・ネイションの強制移住の旅の残虐さによるところが大きかった。1839年以降は、後に南北戦争（1861-1865）へとつながる北部と南部の地域的な意見の相違が政治問題の大部分を占めるようになり、インディアンはほとんど無視された。しかし南北戦争後、西部への領地拡大が再開し、再び白人の入植の妨げになるとしてインディアンを移住させる必要が生じた。それは「居留地」（Reservation）政策時代の到来を告げるものであった。

居留地は、インディアンが農業や機械を扱う技術を身に付けることによって、米国市民権の取得に備える間の一時的な措置として設けられた。居留地の土地は、連邦政府が所有し、そこに住むインディアンに共用地として預けられた。1887年、先住民を「文明化」するさらなる手段として、議会は彼らに私有地を与える決定をした。この「一般土地割当法」に基づき、居留地は小さな区画に分割され、アメリカ先住民の個人および家族に分け与えられた。これによって、政策の振り子は強制的な同化へと戻った。1901年、セオドア・ルーズベルト大統領（在任1901-1909年）は、この法律を「先住民の集団を解体させる巨大な粉砕エンジン」と呼んだ（1901年12月 3 日、セオドア・ルーズベルトの議会に対する初めての年次教書演説）。同法施行の結果、1887年から1934年ま

でに、インディアンの土地の65%がその手から離れた。

インディアン・ニューディール

それまでのあらゆる政策と同様に、「居留地」政策および「一般土地割当法」は、所期の目標を達成できず、「インディアン問題」を解決できなかった。やがて政治の風向きは変わった。政策の方向をインディアンの政治・文化の保護に戻したのは、セオドア・ルーズベルトの従弟のフランクリンであった。フランクリン・ルーズベルトが大統領（在任1933-1945年）に就任し、内務長官のハロルド・イッキーズとインディアン局長のジョン・コリアーによって、インディアン・ニューディール政策が打ち出されたのである。

インディアン・ニューディール政策の中心となったのが、1934年の「インディアン再組織法」（以下、再組織法）であった。再組織法は、インディアン部族にインディアン局の管理下での成文憲法の制定と自治を促した。一部の部族は、部族国家が本来持っていた主権に対する侵害だとして、再組織法に抵抗したが、この新政策の時代は改善に向かう大きな転換となった。「一般土地割当法」は廃止され、インディアンの伝統宗教を信奉することが合法化された（「居留地」政策時代には、違法とされていた）。

南北戦争前の情勢によってインディアン問題が国民的な議題の対象から外されてしまったのと同じように、第二次世界大戦によってもインディアン問題は国民の議論の外に置かれた。しかし、戦後数年たつと、インディアンの主権に反対する勢力が再び頭をもたげ始め、インディアン・ニューディール政策の廃止に向けて動き出した。1948年、議会は、ハーバート・フーバーを委員長とした特別委員会を設けた。フーバーは、大統領（在任1929-1933年）として、「一般土地割当法」を事実上中止したが、この政策を積極的に変更することはなかった。フランクリン・ルーズベルトの政策が成果を上げていたにもかかわらず、フーバー委員会の報告書は、セオドア・ルーズベルトの方針をなぞっただけで、次のように述べている。「歴史的なインディアン文化の基盤は押し流されてしまった。伝統的な部族組織は、1世代前に破壊されてしまった。（中略）同化を公共政策の目標とすべきである」（チャールズ・F・ウィルキンソン著『血の闘争――現代インディアン国家の台頭』（Blood Struggle：The Rise of Modern Indian Nations, 2005）に掲載された引用）。「連邦管理終結」が政府の政策となった。この政策で、連邦政府はインディアン国家との政府対政府の関係を断ち切り、実質的に部族を廃止しようと企てた。その政策の重要な構成要素が「転住」（Relocation）であり、それは、インディアンを居留地から多くの労働人口を必要とする都市部へ移住させるよう誘導することを目的としたプログラムだった。ハリー・トルーマン大統領（在任1945-1953年）が、「連邦管理終結」および「転住」を指揮するためにインディアン局長に任命した人物がディロン・S・マイヤーだった。マイヤーの米国少数者集団に関する経験といえば、第二次大戦中に日系米国人の強制収容所を監督する政府機関である戦時転住局を率いたことであった。「一般土地割当法」の結果、インディアンの土地の65%が失われ、主に「連邦管理終結」と「転住」プログラムの実施により、今日、インディアンの70%以上は居留地以外の場所で暮らしている。

民族自決

「連邦管理終結」を終わらせたのはジョン・F・ケネディ大統領（在任1961-1963年）だが、自決政策を発表したのはニクソン大統領である。これは今日も続いている公式の政策で、この40年間に、先住部族国家は自らを統治しながら自らの運命をより主導的に決められるようになってきた。

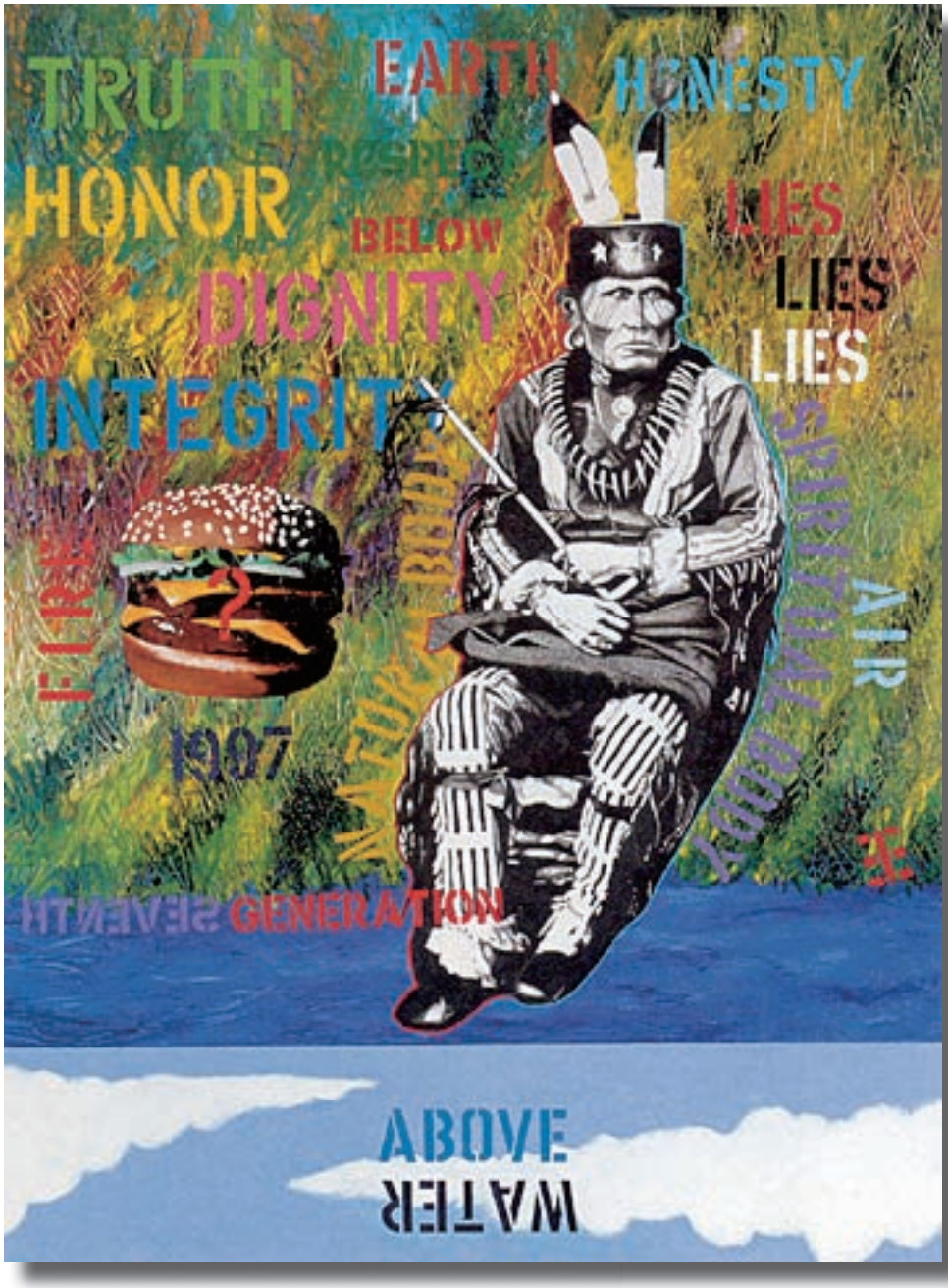
今日、連邦政府から承認を受けている部族の数は562に上る。貧困と医療格差は依然として重大な問題だが、1987年、「カリフォルニア州対ミッション・インディアン・カバゾン・バンド裁判」において、最高裁判所が州にはインディアンが主権を有する土地での賭博施設運営を禁止する権限はないと判決を下した結果、一部の部族は経済的自立を達成した。部族国家の主権が及ぶ領域が拡大したのである。

最近、ジェフ・コーンタッセルとリチャード・ウィトマーは、意義深い著作の中で、政策的に見て、時代は再度転換したと論じた。2人は、われわれは「強制された連邦制」の時代に生きていると主張する。というのも、1988年に（カバゾン判決への対抗策として）「インディアン賭博規制法」（カバゾン判決への対抗策として）が成立して以来、議会は先住部族国家に対し、カジノの新設に関して州政府と交渉することを義務づけるようになったからである。これは、「連邦管理終結」政策以降見られなかった、州によるインディアン部族の自治権に対する侵害に当たる。

オバマ政権のインディアン政策の方向を見極めるには時期尚早であるが、同大統領は自決政策を継続し、その強化をさえ図ろうとしている気配がある。2008年の大統領戦において、オバマは先住民の主権を強く支持する意見を表明した。大統領に就任したオバマは、ポーニー族の法学者で連邦政府のインディアン関連の法律・政策の専門家であるラリー・エコホークを内務省管轄下のインディアン局の局長に任命した。このような望ましい兆候があるにもかかわらず、アメリカ先住民は依然として警戒心を持っている。今はともかく、少なくとも将来いつか、振り子が再び、主権・存続政策から同化・絶滅政策へと振れることを歴史は彼らに教えてきたからだ。

本稿に述べられている意見は、必ずしも米国政府の見解あるいは政策を反映するものではない。

人々とアート



© George Longfish

ジョージ・ロングフィッシュ
「上の如く下も然り」（As Above, So Below） 1998 年。アクリル絵の具、カンバス。
セネカ族とタスカローラ族の血を引くカナダ生まれのロングフィッシュは、社会正義や先住民文化をテーマに、多彩な作品を多く発表している。

人々

この数十年、先住民とその文化的貢献に対しては、歴史上のもののみならず現代においても評価が高まっている。先住民はあらゆる職業に従事しており、その多くは自分たちの文化遺産の保存に取り組んでいる。また少数者集団を代表する役目を果たしたり、少数者集団の教育に当たったりしている。このフォトギャラリーでは、多様な先住民コミュニティが生んだ、非凡な才能を持つ人々と新しいアートを紹介する。

© AP Images/Winnipeg Free Press/Mike Deal

バフィ・セントマリー、シンガーソングライター
カナダ生まれでクリー族の血を引くミュージシャン。1960 年代から、社会正義を訴えるメッセージを世界中の聴衆に送り続けている。セントマリーが作曲した Up Where We Belong はアカデミー賞を受賞した。

© AP Images/John Moore

アレハンドロ・トレド、元ペルー大統領
ケチュア族の農家に生まれ、2001 年、ラテンアメリカで初の先住民の大統領となる。2006 年退任。子供の頃から働いて成人し、ペルー、米国で学業を続けた。

© AP Images/NASA, Kim Shiflett

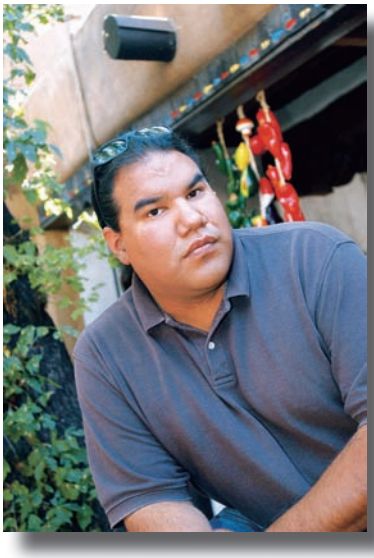
ジョン・ヘリントン、宇宙飛行士
チカソー族のインディアンで、アメリカ先住民として初の宇宙飛行士となる。インディアンの神聖な工芸品と部族からの祝福の言葉を携えて、2002 年、スペースシャトル・エンデバーに搭乗した。

© AP Images/Dado Galdier

リゴベルタ・メンチュウ、グアテマラのノーベル賞受賞者
キチェ族（マヤ人）の小農の家に生まれ、家族と共にコーヒー摘みの仕事をしていたが、後に、社会改革家となる。家族ぐるみでインディアンの権利向上運動に参加した結果、父、母、兄は命を落とし、彼女自身も亡命を余儀なくされた。インディアンの権利、異民族間の対話のために尽力した功績を認められ、1992 年ノーベル平和賞を受賞。

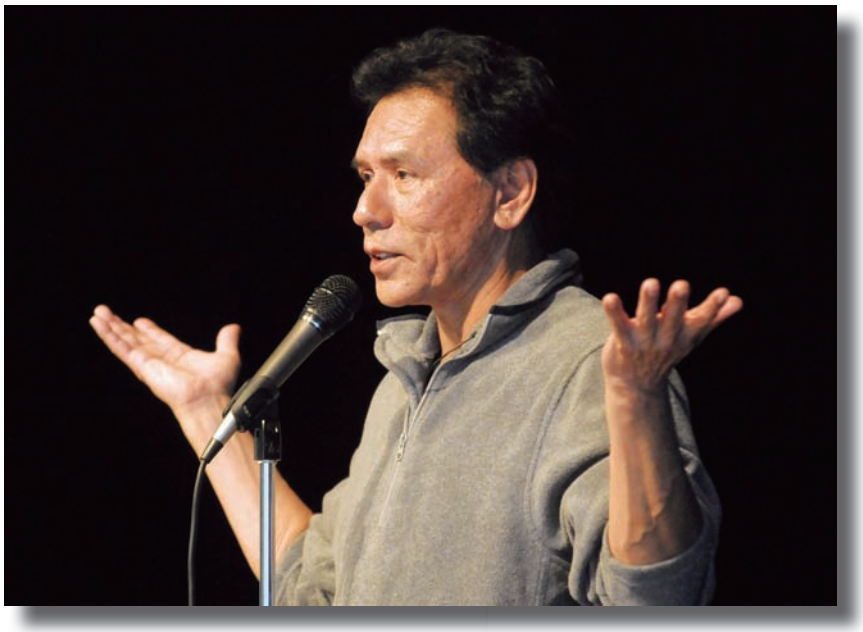
© AP Images/The Denver Post/Leah Bluntschli

今日、ラクロスは人気のある団体スポーツのひとつだが、その起源は、米国の先住民時代にさかのぼる。当時は、数百人が参加し、広大な場所で、祭礼的な目的で行われることが多かった。



© AP Images/Jeff Geissler

クリス・エア、映画監督
シャイアン・アラパホ族の家庭に生まれるが、白人の養父母に育てられる。成人した後、自分の先住民としての出自を見つめ直した。同じくアメリカインディアンであるシャーマン・アレクシーが脚本を担当した「スモーク・シグナルズ」に代表される彼の作品は、アメリカ先住民の生活をさまざまな角度から描いている。



© AP Images/Anchorage Daily News/Erik Hill

ウェス・ステューディ、俳優
「ラスト・オブ・モヒカン」（1992）のマグア役、「ジェロニモ」（1993）のジェロニモ役などで知られる。配役担当ディレクターが、インディアン役に実際のインディアンを起用するようになってから、映画界で名声を博したインディアン俳優の一人。

© Jim Denomie

ジム・デノミー
「エドワード・カーティス・パパラッチ――ブラック・ヒルズ・ゴルフ・アンド・カントリー・クラブ」
(Edward Curtis Paparazzi—Black Hills Golf and Country Club)　2007 年。油彩、カンバス。
ミネソタ在住のこのアーティストには、米国の主流文化を受け入れる先住民文化をテーマにした作品が多い。

Heard Museum, Phoenix, Arizona

ロクサンヌ・スウェンツェル
「道化師たちの出現」(The Emergence of Crowns)　1988 年。ミクストメディアの粘土彫刻。
スウェンツェルの属するサンタクララのプエブロ・インディアンにとっては、陶芸は芸術のひとつである。ここで彼女が表現しているのは、「コシェア」と呼ばれる聖なる道化師で、伝承では、人間の愚かさや悪い行いをからかい、もっと行儀よく振る舞うよう仕向ける存在とされている。

© James Luna

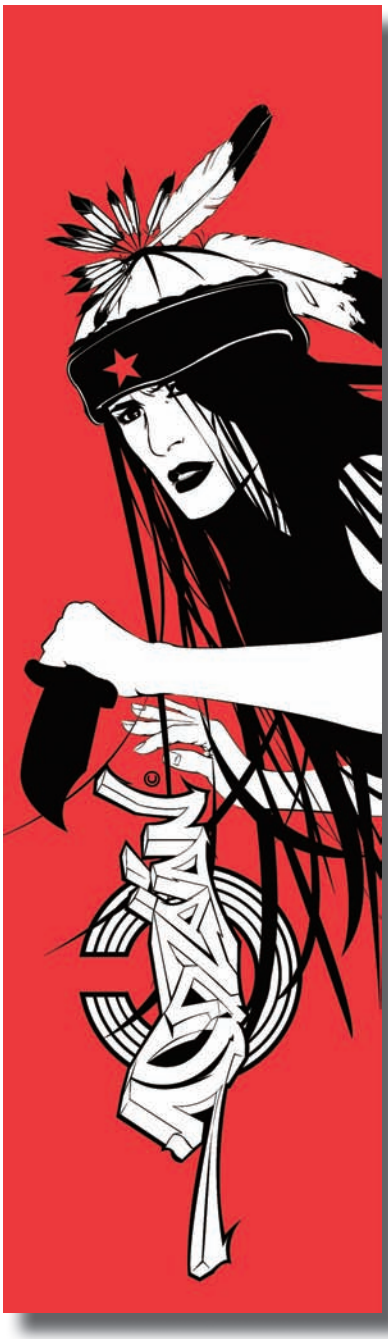
ジェームズ・ルナ
「2 つの世界の出陣の踊りのテクノロジー」
(Two Worlds War Dance Technology)
1990 年。ミクストメディア。
ルイセーニョ族でカリフォルニア出身のパフォーマンス／インスタレーション・アーティスト。この芸術ジャンルについて、「これほどまでに、祭礼や踊り、口頭伝承、現代思想といったさまざまなインディアンの伝統的な形式で、自己表現できる機会を提供してくれるものは、他にない」とルナは述べている。

© AP Images/Marcelo Hernandez

ボリビア、チチカカ湖の近くで、昔ながらの方法でアンデス織物を織るアイマラ族の女性。こうして生産される織物需要が、先住民経済の家内工業を支えている。

Kenneth White/U.S. State Department

ファンシー・ダンス。ダコタ・プレインズ・インディアンは、祭礼のための踊りの文化を復活させた人々である。この羽飾りを付けた男性のファンシー・フェザー・ダンスは、ワシントン DC にある国立アメリカインディアン博物館で開かれた先住民の集会（パウワウ）で披露されたもの。



Courtesy Jolene Nenibah Yazzie/National Museum of American Indian, Smithsonian Institution

ジョリーン・ネニバ・ヤズィー
「純真さを守る者」（Protector of Innocence）
ヤズィーはナバホ族のコミック・イラストレーター。ヤズィーは、自分の漫画に登場するアメリカ先住民女性のスーパーヒーローたちについて、「女性が自分の中にある強さに気づき、それを正しく評価する方法を女性に示す」ために創り出されたと言う。

バンキー・エコーホーク
「その人」（HE WHO） 2008 年。2008 年 5 月にモンタナ州で、バラク・オバマは、クロー・ネイションに養子として受け入れられ、「大地のいたるところで人々を助ける者」というクロー族の名前を与えられた。養親は、ブラック・イーグルという苗字を持つクロー族の長老である。エコーホーク（ポーニー族とヤキマ族の血を引く）は、2008 年の民主党全国大会が開催された際、デンバー美術館で行われたライブアート行事で、この肖像画を描いた。

© Bunky Echo-Hawk

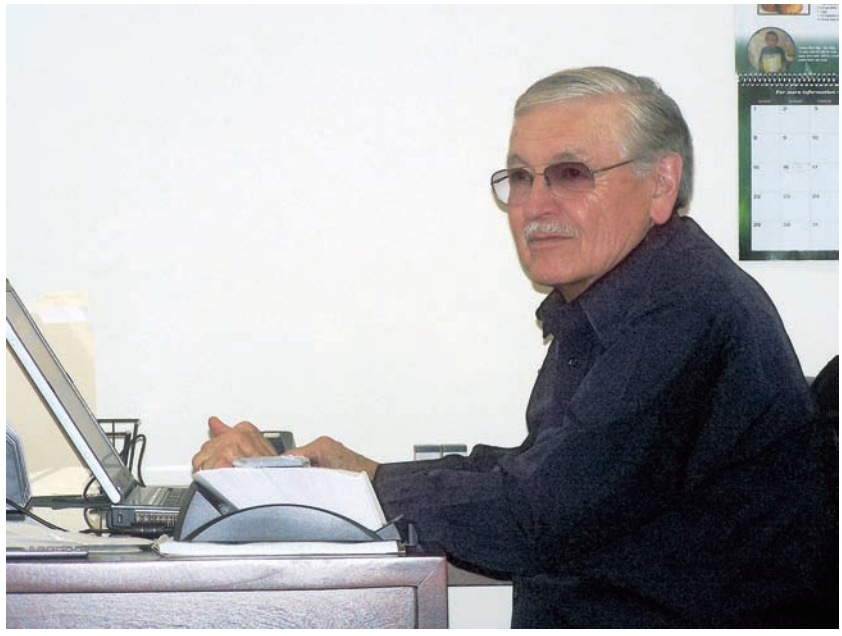
フリッツ・ショルダー
「インディアン No.16」（Indian No. 16） 1967 年。油彩、カンバス。2008 年 11 月 1 日 ～2009 年 8 月 16 日、NMAI で開催された「フリッツ・ショルダー：インディアン／非インディアン展」で展示。
ショルダー（1937-2005）はルイセーニョ族の血を 4 分の 1 引くインディアンであった。論議を呼ぶ一方で大きな影響を与えた彼の作品には、アメリカ先住民という自らの出自に対する苦悩が表れている。ショルダーは、理想化された感傷的なイメージに抵抗し、現代に生きるインディアンの、往々にして困難な現実や内心の葛藤を描いた。

Courtesy National Museum of the American Indian, Smithsonian Institution, Collection of Robert E. Herzstein

真実の灯を掲げ、勝利した先住民所有の新聞

ティム・ジアゴ

ティム・ジアゴは、オグララ・ラコタ族のジャーナリスト・編集者で、1981年サウスダコタ州パインリッジ居留地で「ラコタ・タイムズ」という新聞を創刊した。その後、同紙は「インディアン・カントリー・トゥディ」と名称を変え、米国最大の独立系インディアン紙に成長した。ジアゴは、数多くのアメリカインディアンのジャーナリストを養成し、助言を与えてきた。また多数のジャーナリズム賞を受賞するとともに、ネイティブアメリカン・ジャーナリスト協会を創設し、初代会長を務めた。出版、放送の両メディアで活躍を続け、著作も数冊ある現在、全米に配信されている週刊コラム「インディアン・カントリー通信」を執筆している。一度引退したが、2009年 4 月、週刊新聞「ネイティブ・サン・ニュース」を創刊。復帰の理由をニュースのウェブサイト「ハッフィントン・ポスト」の自らのブログに、インターネット上ではなく、出版物として「インディアン居住地域にニュースを提供する、伝統的な方法を復活させる」ため、と書いている。



Courtesy Native Sun News

編集者・ジャーナリスト、ティム・ジアゴ

今から29年前の1980年、アメリカ先住民所有の独立した週刊新聞は米国にはひとつもなかった。わたしは1981年春に、パインリッジ・インディアン居留地で週刊新聞を創刊しようと決心したとき、その事実を知らなかった。

「事業計画？」「事業計画って何ですか？」居留地との境にある町、ネブラスカ州ラッシュビルの銀行に行くまで、わたしは、当時の金利が20%前後で推移していることもまったく理解していなかった。そして、折しも発表されたばかりの1980年の国勢調査では、パインリッジ居留地の中心であるシャノン郡は、「米国で最も貧しい郡」と名指しされていた。

こうした否定的な条件ばかりの中で、わたしは週刊新聞を創刊した。新聞を始めたのは、それが絶対に必要だったからである。ゴシップや噂や嘘がまん延していたので、人々には真実を知る権利があるとわたしは考えた。真実こそがわたしの掲げる灯であり、真実こそがこの小さな新興新聞を成功に導いたのだ。創刊から 2 年で、わたしたちの新聞は、サウスダコタ州内にある 9 つの全居留地に配布されるようになり、週3000部で始った発行部数は、最初の 3 年で 1 万2000部にまで伸びた。

銃か言葉か

ウーンデッドニー占拠事件（1973年、サウスダコタ州にあるウーンデッドニーの町が、71日間にわたって活動家により武装占拠された事件で、アメリカ先住民をめぐる問題で法的措置が執行され、問題が広く世間に知れ渡るとともに大きな注目を集めた）以降、パインリッジ居留地では暴力事件が相次いだ。派閥と派閥とが争い、われわれの歴史は悲惨な時代を迎えていた。状況をさらに悪化させたのが、1975年、パインリッジ居留地のオグララで起きたFBI捜査官 2 人の殺害事件であった。ラコタ・タイムズはこのような暴力事件の続発に立ち向かい、糾弾しなくてはならない、とわたしは心に決めた。社説では、暴力がわたしたちの部族の将来にどのような損害を与えるかを強い調子で指摘した。また暴力事件を詳しく報道した。ところが、わたしたちが伝えた真実は、暴力を振るう者たちを刺激し、ラコタ・タイムズへの攻撃が始まった。3 回にわたり事務所の窓が銃弾で破壊され、1981年のクリスマスの直前には、火炎瓶が投げ込まれた。

月のない、霧雨の降る夜のことだった。わたしはその日、新聞の仕事を終え、雨の中を外に出て、車に乗り込んだ。そのとき、銃弾が車のフロントガラスを粉々に砕き、わたしの頭をかすめていった。わたしにも妻や子供たちにも「殺して

やる」という脅迫の電話がかかってきた。オグララ・スー族の首長であるジョー・アメリカン・ホースが、部族評議会の特別会議を招集したのは、新聞社のビルに火炎瓶が投げ込まれた後だった。アメリカン・ホースは「今、この瞬間から、ラコタ・タイムズへの攻撃は、オグララ・スー族全体への攻撃と見なす」と述べた。攻撃はぴたりと止んだ。

わたしとわたしの新聞への攻撃について堂々と意見を述べる勇気を持っていた新聞の編集者は、サウスダコタ州全体で 1 人だけだった。その名前はジム・キャリア、「ラピッド・シティ・ジャーナル」の編集長だった。キャリアを除く非インディアン新聞編集者は全員、わたしが同じサウスダコタ州で新聞を編集・発行している仲間であるにもかかわらず、またわたしの新聞がその 1 面に襲撃事件に関する記事を掲載しているにもかかわらず、同業者に起こりつつあることを全面的に無視した。キャリアは、わたしを支持する姿勢を明らかにしてからほどなく、ラピッド・シティ・ジャーナルを解雇された。

From Wikimedia Commons, http://en.wikipedia.org/wiki/File:Newspaper_rock.jpg

初期のジャーナリズム。ニュースペーパー・ロックと呼ばれる、ユタ州にあるに砂岩に刻まれた彫刻には、2000 年にわたるさまざまな時代の人間の活動が記録されている。意味は不明だが、用いられている記号は、フレモント族、アナサジ族、ナバホ族、および白人系の文化に由来している可能性がある。

わたしたちはこの凄まじい嵐をどうにか乗り切り、攻撃されることによってもっと強くなったがさらには、そのおかげでラコタ族の人々をわたしたちの味方につけることができた。この嵐を切り抜けることで、1980 年代の初めに居留地に浸透していた恐怖の念がいくらか静まった。最初、人々は編集者に手紙を書くのを恐れていたが、わたしの故郷であるペジュタハカ（「医薬の根」を意味する）地区の勇気ある女性がラコタ・タイムズに暴力を非難する手紙を寄せ、人々を動かした。この女性は、「わたしが幼いころから知っているラコタの同胞ティム・ジアゴが立ち上がり、暴力と戦えるのであれば、わたしたちラコタ族の女性もそうしなければならない」と書いていた。

ペンは剣よりも強し

その手紙の後、まるで堰を切ったように、部族政府を長い間悩ませてきたあらゆる問題について意見を述べる読者からの手紙が、次々とわたしたちの新聞社に舞い込むようになった。ついに、居留地の人々が自分の意見を表現できる場ができたのである。

100 年以上の間、サウスダコタ州で発行されるどの新聞にも、この州最大のマイノリティであるアメリカ先住民について報道する機会（というより責任と言うべきものか）があったはずである。しかし、これらの新聞はそれを無視することを選択し、わずかな資金で創業したわたしの小さな週刊新聞は、短期間でサウスダコタ州の歴史上で最も発行部数の多い週刊新聞へと成長を遂げた。わたしの新聞が成功したのは、空白を埋め、アメリカ先住民のために 20 世紀のメディアへの扉を開いたからである。

ラコタ・タイムズは、インディアンの人々のための監視機関の役割を果たすようになった。司法上、不平等が行われたと判断すると、その対象が白人であれインディアンであれ、それを糾弾した。そして、この州の法定休日として「アメリカ先住民の日」を設けるべきだと社説で議員・知事に訴え、その通りの成果を勝ち取った。サウスダコタ州は「アメリカ先住民の日」を祝う米国で唯一の州となったが、これもインディアン所有の小さな独立した新聞であるラコタ・タイムズがその実現のために戦っていなければ、起こり得なかったことである。

わたしたちは、銃を使わずに、多くの戦いに勝利した。「ペンは剣よりも強し」という格言が、不変の事実であることを証明したのである。

本稿で述べられている意見は、必ずしも米国政府の見解あるいは政策を反映するものではない。

理解するのは 2 つの言語、だが心に響く言語はひとつ

ルイーズ・アードリック

ルイーズ・アードリックは十数冊の小説、回顧録、詩、子供向けの本などの著作があり、タートル・マウンテン・オジブウェ族の子孫で最も著名なアメリカ先住民作家の一人。小説『ラブ・メディシン』（1984）が賞を受けて有名になる。著作の傍ら、ミネソタ州ミネアポリスで「バーチバーク・ブックス」という小さな書店を営んでいる。本稿でアードリックは、チペワ（オジブウェ）族の言語であるオジブウェ語から自身がどのような刺激を受けているかについて書いている。

© AP Images/Dawn Villella

作家ルイーズ・アードリック。自身が営むミネアポリスの書店バーチバーク・ブックスにて。アードリックの作品は、現代のアメリカ先住民の家族の生活がテーマになっている。

長年、わたしはある言語に恋をしている。といっても、恋の相手はわたしが作品を書くのに使っている英語ではない。そしてそれは苦しい恋であるわたしはオジブウェ語を相手に、毎日、少しでも言葉を覚えようと努力している。動詞の活用表をバッグに入れて持ち歩くのが習慣になっている。活用表と一緒に、本のアイデアや聞きかじった会話、言葉の切れ端、頭に浮かんだフレーズなどを書き留める小さなノートも持ち歩いているが、今ではそのノートに書き込まれるオジブウェ語の数はどんどん増えている。わたしの英語は嫉妬深くオジブウェ語とはなかなか親密になれない。浮気がばれて責めたてられている恋人のように、わたしは今オジブウェ語と英語の両方を懐柔しようと努力している。

オジブウェ語はアニシナーベ語とも言われ、チペワ族により話されている言語である。このオジブウェ語をわたしの家族で最後に話したのは、母方の祖父パトリック・グルノーである。祖父はノースダコタ州のタートル・マウンテン・オジブウェ族で、主に祈りのときにオジブウェ語を使っていた。居留地の外で育ったわたしは、オジブウェ語はカトリックが祈祷に使うラテン語のように、主に祈りに使う言葉だと思っていた。オジブウェ語を話す人は徐々に減ってはいるが、カナダやミネソタ州、ウィスコンシン州で話されていることを、わたしは長い間知らずにいた。オジブウェ語の学習を始めた頃にはニューハンプシャー州に住んでいたので、最初の数年間は語学テープを使っていた。

語学テープからは丁寧表現をいくつか覚えた程度だったが、テープから流れるバジル・ジョンソンの穏やかで凛としたアニシナーベ語の語り口を聞いていると、わたしは故郷へ帰りたい気持ちに駆られた。ニューイングランドの曲がりくねった道で車を走らせながら、車中で一人初歩的なオジブウェ語を口にしていた。今もそうだが、当時も、わたしはどこへ行くにもテープを持ち歩いていた。

オジブウェ語はわたしの心の奥深くに染み込んだが、わたしの恋心は満たされなかった。わたしにはオジブウェ語で話をする相手がいなかった。祖父は神聖なパイプを手に持って、森のトネリコバノカエデの傍に立ち精霊に話し掛けていたものだが、こうした祖父の姿を覚えている人もいなかった。オジブウェ語の先生とオジブウェ族でもある勉強仲間が見つかったのは、中西部に戻ってミネアポリスに腰を落ち着けた後のことだった。

やる気を起こさせてくれる先生

ミネソタ州ミルラクス居留地のオジブウェ族の長老ジム・クラークは、オジブウェ語で「1 日の中心」を意味する「ナアウィギイジス」（Naawi-giizis）と呼ばれ、人を引き付ける朗らかで明るい性格の持ち主である。第二次世界大戦の退役軍人で、頭は短く角刈りにしている。表にはなかなか出さないが思いやりがあり、ちょっとしたしぐさでそうだと分かる。笑うときには全身で笑い、真剣なときにはその眼を少年のようにしっかり見開く。

© AP Images/Wisconsin State Journal/Joseph W. Jackson III

ウィスコンシン州でオジブウェ語イマージョン（集中特訓）教育を実施している学校の生徒たち。イマージョン・プログラムの目的は、先住民族の言語を新しい世代に教え、流暢に話せる高齢者世代が亡くなると消滅してしまう恐れのある言語の保存を図ることにある。

ナアウィギイジスはオジブウェ語のもつ深い英知の世界にわたしをいざなってくれた。この言語を学び続ける気持ちにさせてくれたのもナアウィギイジスである。というのも、わたしは彼の冗談を理解したい一心でオジブウェ語会話に取り組んだのだ。もちろん冗談だけではなく、祈りや adisookaanug（聖なる物語）も理解したいと思っているが、何といってもオジブウェ語の抗しがたい魅力のひとつは、オジブウェ族の人を訪問した際に経験するほとんど絶え間のない大笑いなのである。オジブウェ語を話す人は多くが今ではバイリンガルなので、その言葉は英語とオジブウェ語のだじゃれであふれている。ほとんどは、gichi-mookomaan（大きなナイフ。米国人を指す）の習慣や行動の奇妙さをネタにした言葉遊びである。

英語以外の言語の知識を深めたいという願望が強いあまり、わたしの最初の恋人である英語との関係がおかしくなった。英語は結局、母方の祖先が無理やり教え込まれた言語である。英語のせいで母は母語を話すことができなくなってしまったが、わたしは英語のおかげで何とか糊口をしのいでいる。英語はすべてを貪欲に食べつくす言語である。英語はまるで、空を覆い尽くし熊手や鍬の柄までもむさぼり食う恐るべきイナゴの大群のように、北米を横断して広まっていった。しかし、この何でも食べる入植者の言語は、作家にとっては与えられた才能である。英語で育てられたわたしは、英語とオジブウェ語の盛り合わせというごちそうを食べていることになる。

100 年前、オジブウェ族の大半はオジブウェ語を話していたが、インディアン局と宗教系の寄宿学校は先住民言語を話す子どもたちを罰したり侮辱したりした。この方法は効果を上げ、今では、オジブウェ語を流暢に話せる 30 歳未満の人は米国からほとんど姿を消してしまった。ナアウィギイジスのようにオジブウェ語を話す人々がこの言語を大切にしているのは、ひとつには、オジブウェ語が多くの人々から肉体的に叩き出されてしまったからである。オジブウェ語を流暢に話せる人々はオジブウェ語を守るために身をもって闘わなければならなかった。嘲りに耐え、辱めを受けても抵抗し、何が何でも話し続けると自分に固く誓う必要があったのだ。

大いなる神秘

もちろん、わたしとオジブウェ語の関係はそれとは全然違う。どうして話したこともない言葉に戻るのか。なぜ自分の第 1 言語を愛している作家が、わざわざ別の言語を学習して自分の生活を複雑にする必要があるのか。わたしの場合は、個人的にも一般的な意味合いでも、理由は至極単純である。オジブウェ語でなら神と話ができるということ、それに、どういうわけか祖父の言葉遣いがわたしの体に染みついているということが、この数年の間に分かった。オジブウェ語の響きがわたしに安心感を与えるのである。

オジブウェ族が Gizhe Manidoo と呼ぶすべての生物に宿る偉大で慈愛に満ちた魂、そしてラコタ族が「大いなる神秘」は呼ぶものは、わたしにとって、オジブウェ語の流れと結び付いている。カトリック教徒として受けた教育は、知的な面でも象徴的な意味合いにおいてもわたしに影響を与えはしたが、魂を引き付けることはなかった。

他にも理由はある。オジブウェ語は、北米で今日まで進化して生き残っている数少ない言語のひとつである。オジブウェ語の持つ知性は、その他の言語と違って、北の大地や湖、川、森林、荒地にしっかりと根付いている理念、そこに住む動物やその習性、石の配置そのものにある意味合いなどに順応している。北米の作家として、言葉というわたしのお気に入りの道具を使って、わたしたち人間と場所との結び付きをできる限り深く理解するよう努めることが、わたしにとってはとても重要である。

オジブウェ語とダコタ語には、ミネソタ州のあらゆる地理的特徴を表す地名があり、その中には市立公園や浚渫（しゅんせつ）によりできた湖など、最近加えられたものもある。オジブウェ語は、変化しない言語でも、人の力の及ばない神聖な過去の世界を描写するためだけの言葉でもない。電子メールやコンピューター、インターネット、ファクスなどを表す単語もある。動物園にいる外国の動物を表す単語もある。anaa-mibiig gookoosh は水中の豚を意味し、カバを指す。シラミを取るものという意味の nandookomeshiinh はサルのことである。

12段階プログラム（訳注：アルコールや薬物中毒などの更生プログラム）の中に使われている「静穏の祈り」を唱えるための言葉や、童謡の翻訳もある。オジブウェ族すなわちアニシナーベ族以外のさまざまな人々を指す名前もある。お茶の人々という意味の aiibiishaabookewininiwag はアジア人のことであり、シマリスの人々という意味の agongosininiwag はスカンジナビア人を表している。なぜそう呼ばれるのか、わたしには今もって分からない。

オジブウェ語の複雑さ

長い間、わたしはオジブウェ語の表面しか見てこなかった。少しでも勉強すれば、動詞の驚くべき複雑さの深淵を覗き込むことになる。オジブウェ語は動詞の言語である。すべてが動作を表す。単語の 3 分の 2 が動詞であり、それぞれの動詞に 6000 もの形がある。動詞の形が驚くほど多いことで、いろいろな状況に適応できるので、正確な描写力のある言語になっている。changite-ige という言葉は、アヒルがお尻から先に水に入るという動作を表現している。口にパイプをくわえた男がバイクから落ちて、パイプの柄がその男の後頭部を突き抜けたらどうなるかを表現する動詞もある。どんなことにも動詞があり得るのだ。

名詞については多少ほっとできる。目的語になる名詞がそれほど多くないのだ。オジブウェ語には、意図的とは言えないにしても、差別的な表現を避けようとする面が多少あり、文法に性の決まりごとがない。所有格と冠詞にも女性形、男性形はない。

名詞は大抵の場合、生きているか死んでいるか、生物か無生物かを指定される。石を表す単語の asin は、生物である。石は、おじいさん、おばあさんと呼ばれ、オジブウェ族の哲学では非常に重要な存在である。わたしは、石が命ある存在だと考え始めた途端、わたしが石を拾っているのか、それとも石が自らの意思でわたしの手の中に入って来るのかという疑問を感じるようになった。石の意味が、英語で考えていたときと同じではなくなっている。今では、石について書くときはいつでも、オジブウェ語で言う石の意味を考え、アニシナーベ族にとっての宇宙は石同士の会話から始まったのだということを意識する。

オジブウェ語は感情の言語でもあり、微妙な感情の意味合いを絵の具のように混ぜることができる。心の中でひそかに涙を流すときに何が起こるかを表す単語もある。またオジブウェ語は、理性の状態や、道徳的責任の微妙な問題を表現するのにとりわけ優れた言語である。

ozozamenimaa という言葉は、人が才能の使い方を誤って始末に負えなくなった状態によく使われる。ozozamichige は、今からでも修正できるという意味である。愛情の種類も英語より数が多い。また人間が抱く感情の微妙な違いを示す表現が無数にあり、その表現によって、さまざまな家族や部族のメンバーの誰のことかを表すことができる。オジブウェ語はまた、創造主である神の人間くささや、深く宗教に傾倒した人物にすら非常識で驚くほどの性衝動があることも知っている言語なのである。

オジブウェ語はわたしが書く文章の中に徐々に入り込んできて、ところどころで単語や概念がオジブウェ語のものに置き換わり、重みを増し始めている。もちろん、ナボコフの逆を行って、オジブエ語で物語を書くことも考えた。しかし、わたしのオジブウェ語は無邪気な 4 歳児程度のレベルなので、多分書くことはないだろう。

オジブウェ語はもともと書記言語ではなかったが、人々は単純に英語のアルファベットを当てはめ、発音どおりに表記するようになった。第二次世界大戦中、オジブウェ族の長老のジム・クラーク（ナアウィギイジス）は欧州からおじ宛てにオジブウェ語で手紙を書いた。手紙の内容を理解できる検閲官がいなかったため、彼は自分の行動を自由に伝えることができた。最近になってオジブウェ語の音声表記法は標準化された。それでも、活用形が難解な動詞を正しく使って書こうとすると、1 パラグラフ程度の文章でも、わたしには 1 日がかりの仕事になる。たとえ書けたとしても、方言が非常に多いため、オジブウェ語の話者が見れば、わたしの書いたものには間違いがあるだろう。

オジブウェ語を流暢に話す人からすれば、わたしのオジブウェ語はひどいものに聞こえると思うが、これまでほんの一瞬でも、いら立ちを示されたり笑われたりしたことはない。わたしが部屋を出ていくのを待っていたにすぎないのかもしれない。しかしそれよりも、オジブウェ語を話す努力を絶やしてはならないという切迫感があるのだと思う。オジブウェ語を話す人々は、オジブウェ語を深く愛している。単語ひとつひとつに魂があり、その単語の元になった霊が宿っているのである。

オジブウェ語の学習者は、この言語を話そうとする前に、これらの単語に宿っている魂や霊を、タバコや食物という天の恵みと合わせて理解しなければならない。オジブウェ語を学ぼうとする者は誰でも、単に舌をかみそうな言葉を覚える以上のことに関わっているのである。わたしの使う名詞がどれほど不適切で、動詞がどれほど不安定であったとしても、またわたしがどんなにつかえながら話したとしても、オジブウェ語を話すということは、オジブウェ語の持つ魂に関わることなのである。たぶん、わたしにオジブウェ語を教えてくれる人たちにはこうしたことが分かっているだろうし、わたしの英語も、このような形でオジブウェ語にかかわるわたしのことを大目に見てくれると思う。

本稿に述べられている意見は、必ずしも米国政府の見解もしくは政策を反映するものではない。

消滅の危機にある言語

アキラ・Y・ヤマモト

© AP Images/Eraldo Peres

ブラジル憲法を手にする先住部族民。先住民族の地位および言語を法的に認め、これを保護することが、先住民族の文化の存続に不可欠である。

日本生まれのアキラ・Y・ヤマモト（山本昭）は、研究者としての長いキャリアを、消滅の危機に瀕している先住民の言語や文化の振興にささげてきた。現在、カンザス大学の人類学および言語学の名誉教授。米国言語学会の「危機言語とその保存に関する委員会」の委員長、および国連教育科学文化機関（ユネスコ）の「危機言語専門家特別部会」の共同議長を務めた。数多くの著作があり、ワラパイ語やキカプー語、俳句に関する著作もある。

チャミクロ族の老女ナタリア・サンガマは、1999年に以下のようなことを話している。

チャミクロ語で夢を見ても
　誰にも
　その夢を話せない
わたしのほかに
　チャミクロ語を話す者がいないから
最後の一人になるのは寂しいことだ

チャミクロ語（またはチャメコロ語）は、ペルーのラグナス地方の言語である。ユネスコがまとめた『消滅の危機に瀕している世界の言語の地図』によると、チャミクロ語を話す人は 8 人しかおらず、消滅寸前の危機にあるという。『エスノローグ 2005 年版』（訳注：少数言語の研究団体 SIL インターナショナルのデータベース）によると、世界の言語分布は以下のようになっている。

地域	言語の数	全体に占める割合
欧州	239	3.5%
アメリカ大陸	1,002	14.5%
アフリカ	2,092	30.3%
アジア	2,269	32.8%
太平洋	1,310	19.0%
5 地域計	6,912	100%

話者の数が 100 万人を超える言語は 347 あるが、世界で話されている言語の 95%は話者の数が 100 万人をはるかに下回る。

世界中で消えつつある言語

ユネスコの『消滅の危機に瀕している世界の言語の地図』（以下『地図』という）は、程度はさまざまだが、世界で 2279 の言語が危機に瀕していることを資料を示して実証している。このうち 538 の言語は消滅寸前の危機にあり、最年少の話者ですら高齢で、この言語による意思疎通はたまに行われるだけか、もしくはめったに行われることがない。従って、この 538 の言語は、今後数年のうちに、話者が亡くなるのと同時に消滅してしまうと考えざるを得ない。

言語が消滅しつつある理由は、人々が自分の継承言語を使うことをやめ、代わりに、政治的、経済的、軍事的、宗教的な観点のいずれか、またはすべてにおいて支配的地位にある言語を使い始めるからである。

人災や天災以外に、言語が消滅する主な理由としては以下のようなことが挙げられる。

- 正規の学校教育で使われる言語が、子どもたちの継承言語でないため、その習得が不十分になる。
- マスメディアの報道、エンターテインメント、その他の文化作品がすべて支配言語で提供されている。
- 支配言語が重要視され、継承言語がより低く見られる。
- 都市化や移住、雇用の流動化により、言語共同体の崩壊現象が起こる。
- 労働市場で支配言語の知識が求められるため、継承言語が不利益を被る。
- 多言語を話せることが評価されず、支配言語 1 語だけの使用が望ましく、かつ十分だと見なされる。
- 国家（1 国家 1 言語）や個人にとっては、支配言語の使用が望ましいとされ、それが子どもに継承言語と支配言語のいずれを学習するか選択させなければならないという考え方を助長する。

言語共同体に外部から影響を及ぼす圧力のひとつに、政府の言語政策がある。言語政策によって「言語的人権」が十分に保護されていない場合、言語共同体はその継承言語を放棄せざるを得ないこともある。継承言語を尊重する政策が採られると、言語共同体による継承言語の保持および振興が促進される。ユネスコの報告書『言語の活力と消滅の危機』は、各国政府の言語政策とその影響についてまとめているが、言語政策の内容は、多様な言語の価値を認めて特定言語に法的保護を与える政策から、支配言語への消極的、積極的、あるいは強制的な同化を促進する政策までさまざまである。

このような外的要因は、継承言語を話す人々が自分たちの言語の価値と役割をどうとらえるかという考え方の形成に影響を与える。前出のユネスコの調査報告書『言語の活力と消滅の危機』によると、言語共同体の構成員は通常、自分たちの言語に対してどっちつかずの態度を取ることはないという。「その言語を共同体や自分のアイデンティティーにとって不可欠なものと見なして奨励する場合もあれば、奨励はしないが使っている場合もある。自分たちの言語を話すことは恥だと思っているために奨励しない場合や、その言語を話すことが迷惑になると考えて自分から使うのを避ける場合もある」と報告書は述べている。

各国の取り組み

世界各地の先住民の言語共同体から、先祖伝来の言語が急速に消えつつある。こうした危機を受けて、先住民言語を記録したり復活させたりする取り組みが、草の根レベルと政府レベルの両方で進められている。先住民言語の著しい振興や復活はまだ先のことだが、そのための取り組みは増えつつある。

カナダにはファースト・ネイションの共同体が 600、イヌイットの共同体が 50、メティスの共同体が 80 あり、カナダの総人口の約 3 %を占めている。（イヌイットは北極地域の先住民、メティスはヨーロッパ人と結婚した先住民の子孫であるが、そのどちらでもないカナダ先住民の部族を「ファースト・ネイション」という。）『地図』は 86 の先住民言語が危機に瀕していることを確認しているが、そのうち先住民の共同体の中に今後も残って使われ続けるのは、クリー語、イヌクティトゥット語、アニシナーベ語（オジブウェ語）のわずか 3 つしかないと予測している。1998 年、カナダ政府は「先住民言語イニシアティブ」を導入した。これは地域共同体を基盤とする、先住民言語保護プロジェクトを支援する取り組みである。1989 年には、「全カナダ先住民言語の日」が宣言された。かつて、先住民の子どもたちは家族から無理や

り引き離され、寄宿学校に入れられて虐待されたが、これについて、スティーブン・ハーパー首相は2008年、ファースト・ネイション、イヌイット、メティスの人々に対して謝罪した。

『地図』によると、オーストラリアでは102の先住民言語が危機に瀕している。現在、状況は極めて深刻である。というのも、これらの言語を今も話している人のほとんどは高齢者であり、若い世代への言語の継承がほとんど、あるいはまったく行われていないからだ。ニューサウスウェールズ州は、アボリジニの言語の保持、復活、回復を提唱する「アボリジニ教育政策」を取り入れた。この政策を補強するため、同州政府は「アボリジニの人々に対する公約の声明」を発表した。そこには、「言語は文化遺産であり、文化的アイデンティティーの重要な要素である。（中略）アボリジニ語の学習は、アボリジニの生徒に欠かすことのできない経験として重要であることを認める」と書かれている。ケビン・ラッド首相は2008年、政府が過去に行ったアボリジニ先住民に対する権利侵害について公式に謝罪した。

日本の最北端に位置する北海道には、およそ2万4000人のアイヌ先住民がいると推定されている。ただし、差別を恐れて自らの民族的出自を明かさない人も加えれば、その数はもっと多いだろう。アイヌ語を流暢に話す人は40人程度と考えられるが、第2言語としてアイヌ語を学習する人の数は増えている。明治維新後の1869年、北海道の統治と開発のために政府が「開拓使」を設置し、アイヌ民族に対する強制的な同化政策が始まった。日本語を普及させようとする政府の政策の結果として、アイヌ語は急速に衰退した。2008年6月、アイヌ民族の苦難を認め、アイヌ語とアイヌ文化の復活を図るため草の根レベルの取り組みを推進するという、前例のない決議が国会で採択された。

メキシコは多文化、多言語の国で、144の先住民言語が危機に瀕していると推定されている。2001年、先住民族の権利とコミュニティの存在がメキシコ憲法に組み込まれて認められた。2003年には、「先住民の言語権に関する一般法」が政令として発布された。草の根レベルの先住民組織が研究者と緊密に協力し、先住民の言語を記録し復活させる取り組みを行っている。先住民言語の識字運動も、さまざまな言語共同体で盛んになりつつある。

パプアニューギニアは言語の多様性が世界で最も大きい国であり、人口520万の国で823の言語が実際に話されている（2000年国勢調査）。1870年から1950年代までは、学校の大半はキリスト教の布教団によって設立され、現地語が指導言語として使われていた。1950年代になって英語のみを使用する政策が実施されたが、1975年の独立後にこの政策の見直しが行われた。1979年から1995年にかけて、義務教育前の子どもたちに現地語を教えるプログラムが非公式に広まった。1995年、政府の政策によって現地語の教育を初等教育期間に取り入れることが義務づけられ、英語は指導言語のひとつという位置づけに徐々に移行していくことになった。

ベネズエラでは34の先住民言語が危機に瀕している。1999年に採択された現行憲法では、スペイン語と先住民族の言語を公用語として定めている。研究者たちは先住民コミュニティと協力しながら、先住民言語を記録し復活させる作業に積極的に取り組んでいる。

米国の先住民言語

ヨーロッパ人との接触が始まった頃、北米には50を超える語族に属する先住民族の言語が300程度あったと推定されている。1891年にジョン・ウェスリー・パウエルが行ったアメリカ先住民の言語について初めての主要な分類では58の語族が確認された。『地図』によると、1950年以前には米国に192の言語が存在していたが、その後53言語が消滅し、一人以上の話者がいる言語数は139となった。11の言語は、子どもたちのほとんどがその言語を話すものの、言語の使用が家庭内など特定の範囲に限定されているために「安全ではない」（unsafe）と分類されている。25の言語は「確実に危機が迫っている」（definitely endangered）と分類され、これは子どもたちがもはやその言語を母語として習得していないことを意味している。32の言語は、話者が主に高齢であり「深刻な危機に瀕している」（severely endangered）。71の言語は、

© AP Images/Don Ryan

オレゴン州のユマティラ・インディアン居留地で、部族の長老から部族語を学ぶワラワラ族の青年。高齢者世代しか先住民言語を流暢に話せない場合、その言語を救うのに最良なのはこうした方法であることが多い。

Courtesy Ted Vaughn and Akira Yamamoto

アリゾナ州プレスコットで部族語の辞書を作成するヤバパイ族の長老テッド・ボーン、後ろに立つのがアキラ・Y・ヤマモト。

2008年 1 月に亡くなったイーヤク語の最後の話者マリー・スミスは、次のように訴えていた。「自分が使っている言語の最後の話し手になってしまうのは悲しいことです。思いとどまって、自分の母語を学んでください。そうすれば、わたしのように一人になることはないでしょう」(コディアック・デイリー・ミラー紙、2006年 8 月20日)。

1970年代以降、継承言語を家庭や地域社会、学校で復活させるプログラムが、個人や言語共同体によって運営されてきた。さまざまな言語共同体があるため、言語プログラムも多種多様である。例えば、数十年間も話されることのなかった言語を、記録資料に基づいて「復活」させるというプログラムがある。残っている話者が高齢である場合などには、一対一で話者から直接教えてもらうプログラムもある。学童やその親を対象に継承言語を改めて学習させたり、継承言語を媒体手段として利用したりすることもある。また多くは、継承言語を学習教科として教えているものも多い。こうしたプログラムはあらゆる年齢層を対象にしている。

最も若い話者が高齢者であるため「消滅寸前である」(critically endangered) と分類されている。

米国では、すべての先住民言語が危機に瀕している。アラスカには一人以上の話者がいる先住民言語が21あるが、そのうちのイーヤク語は、最後の話者が2008年に亡くなった。最も多様な言語が存在するのはカリフォルニア州である。パウエルが確認した58語族のうち、22語族がカリフォルニア州に住んでいた。カリフォルニア州の言語は全米で最も危機に苦しんだが、それでも依然として多様性に富んでいる。カリフォルニア州の先住インディアンの言語の半数近くが1950年代以降に消滅したものの、一人以上の話者がいる言語が30残っている。

米国における言語保存活動

アメリカ先住民社会の言語専門家や指導者や個々の構成員は、先住民の言語が急速に消滅していることに対して、部族の人々や政治家や一般市民の関心を高めようとしている。オジブウェ・ネイション議会議長のフロイド・ジュールダン・ジュニアは先頃、そのレッド・レーク・オジブウェ・ネイションの人々に対して次のように語った。「われわれのオジブウェ語は、はっきり言って、危機的状態にある。(中略)われわれの推定では、部族の中に残っているオジブウェ語を流暢に話す人はわずか300人ほどにすぎない。オジブウェ族の公式登録者数は9397人である」(ベミジ・パイオニア紙、2009年 4 月 6 日)。

1988年、アリゾナ州テンピで「アメリカ先住民言語問題会議」が開かれ、アメリカ先住民の指導者、言語共同体の構成員、教育者、言語学者などが一堂に会した。会議では、アメリカ先住民の言語権に関する決議案が作成され、討議の結果、出席者によって承認された。決議は上院インディアン問題特別委員会に送付され、それがきっかけとなって、1990年、「アメリカ先住民言語法」が議会を通過した。この法律は、アメリカ先住民の文化や言語の独自性とその保存のために政府が先住民と協力して果たすべき責任を強調することによって、先住民諸民族の基本的人権の問題を正式に取り上げている。すなわち、先住民の伝統的文化や政治を元のままの状態で残すためには、文学、歴史、宗教、その他の価値観を伝えなければならず、伝統言語は先住民文化やアイデンティティーにとって欠かせない要素だということを、この法律は認めているのである。同法はまた、言語が、同じ言語を共有する人々にとって、国際的に意思疎通をするための直接的かつ強力な手段であることも認めている。この法律が施行されてから、意欲ある言語共同体は法的および財政的支援を受けている。だだし、財政面での支援額は限られている。専門家レベルでは、米国言語学会が先住民言語の記録採集、復活、一般の人々の意識向上を目指す運動を展開している。

現状、そして将来の方向

近年、2 言語併用政策に対する考え方が徐々に変化してきている。すなわち、2 言語併用教育を、奨励はしないまでも認めるようになってきている。最も顕著な変化が見られるのは、アメリカ先住民コミュニティ内部の考え方である。継承言語を使用することを以前は恥だと思っていたのが、今では自らの言語に誇りを持つようになった。若い世代は先住民言語の復活に意欲的に興味を示し、言語プログラムの数も増えつつある。

制度面でも、先住民言語教育を積極的に進める取り組みが増えている。

「先住民言語研究所」などの組織は、先住民言語の資料の収集および復活に取り組む共同体や個人を、政府や非政府組織、国際機関から助成金や技術援助により支援している（補足資料――機関リストを参照）。

すべての言語はそれぞれに貴重なものである。言葉を使って、人間は集団を形成する。言葉を使って、人間はひとつの宇宙――人間とその周囲の環境との関係が築かれ、育まれ、維持されている宇宙――を創造する。われわれがひとつの言語を失うということは、ひとつの世界観、ひとつの固有なアイデンティティー、ひとつの知識の宝庫を失うということである。われわれは多様性と人権を失うのである。ナバホ族の長老の言葉が、それを雄弁に物語っている。

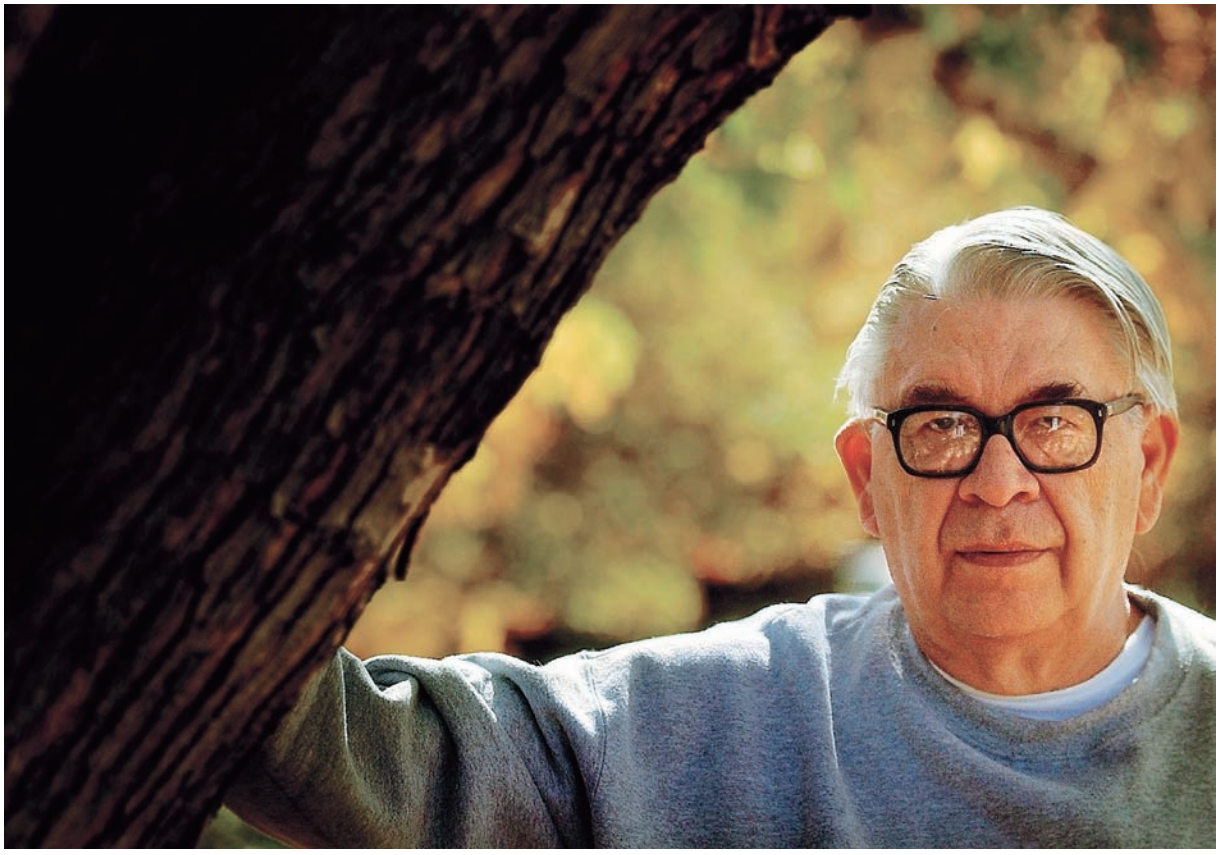
目を開けて見なければ
空はない。
耳を傾けなければ
祖先はいない。
呼吸しなければ
大気はない。
歩かなければ
大地はない。
話さなければ
世界はない。

（ナバホ族の長老の言葉をヤマモトが意訳したもの。PBS テレビ、ミレニアム・シリーズ「部族の知恵と現代世界」より）

本稿に述べられている意見は、米国政府の見解あるいは政策を必ずしも反映するものではない。

精霊たちの世界

バイン・デロリア・ジュニア



© AP Images/The Denver Post/Cyrus McCrimmon

20 世紀有数のアメリカ先住民の歴史家・解説者であった故バイン・デロリア・ジュニア

ダコタ（スタンディング・ロック）・スー族のバイン・デロリア・ジュニア（1933-2005）は、多くの人々から 20 世紀有数のアメリカ先住民学者として認められている。その多岐にわたる研究や著作、教えは、アメリカ先住民にも非先住民にも等しく影響を与え続けている。歴史、法律、宗教、政治学に関するデロリアの研究は、物議を醸すことも多かったが、アメリカ先住民についての考え方の形成と先住民の権利擁護に貢献した。デロリアは最初の著作『カスターは汝がために死せり』（Custer Died for Your Sins）で評価を受け、その後に書いた多くの著作で、インディアン文化を名誉ある地位へ回復させるために力を注いだ。米国議会でインディアン問題について証言し、コロラド大学とアリゾナ大学の教授を務めた。デロリアの議論にはユーモアと辛らつさが同居している。彼の有名な言葉がある。「白人がやって来る前はアメリカを何と呼んでいたのか、と人類学者がインディアンに尋ねた。インディアンはただ一言、『わたしたちの土地』と答えた」

『神は赤い』（God Is Red）より

わたしがまだ幼く、サウスダコタを父と旅していた頃、父はビュートという切り立った丘や峡谷、川の合流点、古い道などをたびたび指差しては、その場所をめぐる物語を教えてくれたものだ。当時は州間幹線道路が建設される前のことで、道路の多くは土地の仕切りを示すフェンスに沿って伸びる 2 本の轍にすぎなかったので、そうした場所を近くから観察することができた。その場所を間近に見たことやそこにまつわる物語のために、その風景の特徴について、いつまでも忘れられない数々の記憶がわたしの中に残った。父は、他の人々が見逃していたり、まったく知らなかったりする細かいことを覚えているらしく、ビジョン・クエスト（最初の霊的通過儀礼）が行われたビュートや、スー族のあの女性が狼たちと一緒に暮らしていたスタンディング・ロック近くの丘や、ミズーリ川沿いの人目に付かない上陸地点を指し示すことができた。部族の人々はこの川を横断していたし、またその遠縁の名高い盗賊ジャック・サリーはこの川を使って民警団の捜索を逃れた。

わたしはいくつかの場所に敬意を抱くようになり、その場所にまつわる物語をできる限り伝えてきたが、実際に訪れることはめったになかった。特定の場所における人間の活動を記憶することは、他の方法では得ることができなかったある種の神聖さをその場所に与えるようにわたしには思えた。さ

まざまな場所が持つ神聖さの違いも徐々に分かるようになった。場所そのものが神聖だという場合もあれば、何世代にもわたって大切にされてその部族の歴史の一部になっており、ひいては部族の存在そのものの一部として崇められるようになった場所もある。インディアンによる抗議運動が盛んになり、多くの若者を引き付けるようになるにつれ、聖地の回復とその地における儀式の再開に多くのエネルギーが集中的に注がれるようになった。

わたしが子どもの頃に目にした部族の老人たち、彼らが自らの信仰に寄せるこの上なく誠実な思い、重要な問題に急いで答えを出さない謙虚さとためらいの気持ちなどに思いをはせながら、わたしはこの本（『God Is Red』のこと）を書いた。そしてそれを通じて、再度われわれアメリカ先住民の宗教的伝統に対する理解を大いに深めるようになった。この本を書いてから、わたしは次第にこう考えるようになった。すなわち、昔の物語は可能な限り文字どおりに理解されなければならず、この宇宙の複雑さにまつわる深い神秘とそれに対するより深い認識はわれわれの祖先が体験によって得たものであり、その信仰や経験を何かしらわれわれのものにすることができるかもしれない、と。

例えばブラック・エルク（オグララ・ラコタ族の聖人）は、大勢の人が輪になっているビジョンをたくさん見ている。われわれは、いろいろな部族にそれぞれの伝統と儀式があること、従って、ある特定の集団に属する人々とその信仰だけが神聖というわけではないことを十分理解している。とはいえ、複数の部族の伝統を検証してみると、インディアンが生命の「大いなる神秘」と出会う道はおおむね、真っすぐで満足感を与えるものであったことが分かる。こうした検証はほとんどの部族について可能であり、結果として、部族の人々が生きるために霊的な力をどのように使ったかを物語る話が数多く集まるだろう。そして、われわれはそのような霊的な力を、人々の経験が時間と空間によって制約されることのない聖なる場所においては、ほぼいつでも手にすることができる。

God Is Red：A Native View of Religion. Copyright @1972, Fulcrum Publishing. All Rights Reserved.

『かつてわれわれが住んでいた世界』（The World We Used to Live In）より

インディアンの部族はそれぞれ、他のすべての人々と異なる霊的な遺産を継承している。事実、その昔、ほとんどの部族は、世界やそこに住む生き物と自分たちとの独特の関係に気付いて、自らを単に「人間たち」とか「最初の人間たち」と呼んだ。彼らは自らを独自の存在と見なし、数え切れないほどの世代にわたって経験してきた精霊たちの指示に厳格に従い、他の人々にも自分たちと同じ権利と地位があることを認めていた。だから、生きるための指針である伝統をめぐって争うということは馬鹿げたことに感じられた。宗教戦争など考えもつかなかった。猟場や漁場をめぐって激しく戦ったり、報復のために戦いを始めたりすることはあったかもしれないが、信仰や慣習をめぐって争いに似たものが起きるとすれば、せいぜい、その部族が他の部族の持っているまじないや霊力の効果を打ち消すためのまじないや霊力をに手に入れる程度のことであった。

霊的な力を発現させる方法の多くは、各部族に共通していたようである。サンダンス（歌や踊りや断食などで太陽をあがめる儀式で、夏至の前後に行われる）、スピリット・ロッジ（円柱形の皮張りのテントを作り、中でまじない師が祈りや歌の儀式を行う）、ビジョン・クエスト（荒野に聖地を定めその場で断食を行いながらビジョンの経験を求める通過儀礼）、スウェット・ロッジ（水蒸気で蒸された半円球のドーム内で祈りや太鼓などの儀式を行う）、聖なる石の使用などの儀式は古くからあったもので、形式に若干の違いはあるものの多くの部族が行っていた。特定の鳥や動物の力を借りることもあり、その形式はある程統一されていた。多くの部族の人々がクマ、オオカミ、タカ、バッファロー、ヘビから力を借りているが、これらの動物の効用は、病気を治癒する、予言を行う、危険から身を守るなど、似たようなものが多かった。

わたしはサウスダコタ州ベネット郡で育ち、そこで昔話を聞いたり、霊的指導者が当時まだ行なっていた風変わりなことを時々耳にしたりしていたため、古い時代の出来事についての話の信ぴょう性を心情的な意味でも知的な意味でもこれまで疑ったことはない。長年の間、わたしは人々が語る物語に耳を傾けてきたし、驚くべき霊力が示されたという出来事の話に偶然出会うこともあった。われわれの祖先は差し迫った現実の問題を解決するため、高次元の霊的存在の助けを祈願した。解決すべき問題には、獲物を見つける、未来を予言する、まじないについて学ぶ、癒しの儀式に参加する、他の生き物と会話する、失くした物を見つけるといったもののほか、風や雲、山、雷など自然界の現象を支配する高次元の霊との関係を通じて自然事象の流れを変えるということもあった。わたしは、インディアンのコミュニティには迷信がほとんど存在しないことを知っており、これらの話は過去の出来事の偽りない記憶であると常々考えている。まじない師は、大勢のインディアンが集まって口々に「実際にやって見せてくれ」（Show Me）と言っている中で、癒しや予言の儀式を行なうのが普通だったからである。ミズーリ州がShow Meという言葉を州のスローガンにしたのはそれからずっと後のことだ。

The World We Used to Live In：Remembering the Powers of the Medicine Men. Copyright @2006, Fulcrum Publishing. All Rights Reserved.

儀式

ジョセフ・ブルチャック

アベナキ族の血を引いていることに触発されたジョセフ・ブルチャックは、アメリカ先住民の物語作家となり、さまざまなアメリカ先住民部族の伝統に光を当てることにその生涯をささげている。アベナキ族は、北米東部でワバナキ同盟を結成していた 5 部族のうちのひとつである。ブルチャックには、大人や子ども向けの詩、フィクション、ノンフィクションなど 70 冊以上の著作があり、全米図書賞、全米子供向け科学書賞、チェロキー・ネイション散文賞、児童文学の優れた功績に対するホープ・S・ディーン賞など、数多くの賞を受賞している。ブルチャックは出版社グリーンフィールド・レビューの創設者であり、米国内外で物語作家として幅広く活躍している。

© AP Images/Albuquerque Journal/Paul Bearce

ニューメキシコ州アルバカーキでは毎年、「ギャザリング・オブ・ネイションズ・パウワウ」という先住民族の集会が開かれる。こうした大規模な儀式用の踊りは、各部族の長老にとって、若い世代に伝統を伝え、他の部族のならわしを教えるよい機会になる。

美を前にわたしは歩く
美を足元にわたしは歩く
美に包まれてわたしは歩く
美の中ですべては回復される
美の中ですべては完全になる
——ディネ（ナバホ）族『ナイトウェイ』より

「毎朝目覚めて台所で水を飲むとき、わたしはいつも水への感謝を忘れないようにしている」 この言葉は 30 年前に「オノンダガ・クランマザー（族母）」であるデワセンタがわたしに言った言葉である。デワセンタは、万物の間に神聖な関係があることや、わたしたち人間にはその関係を受け入れる義務があることを、いつもわたしに気付かせてくれた。

米国人の生活の中でこのような神聖な関係を表すやり方のひとつに、ヨーロッパ人が儀式と呼ぶものがある。辞書の定義によれば、儀式とは、慣習や部族が定める手順に従って厳粛に執り行われるひとつの（または一連の）形式的行為である。この定義は確かにその通りであるが、アメリカインディアンにとって、儀式は生活そのものだと言うこともできる。モホーク族の長老トム・ポーターは、インディアンに儀式が多い理由のひとつは、人間は忘れっぽいからだと説明した。われわれが、毎日感謝すること、そして感謝と尊敬の念を持って行動することを忘れなければ、それで十分だろう。だが、われわれが物事を忘れるたびに、それを思い出すためにより多くの儀式が必要になるのである。

アメリカインディアンの儀式は、祈りとともにタバコを供えるといった単純なものもあれば、ディネ族の癒しの儀式のように複雑なものもある。こうした伝統的儀式はウェイ（Way）と呼ばれ、高度な訓練を受けた hataaXii（「詠唱者」）が執り行う。詠唱者は、ひとつ（あるいは複数）のウェイについて、詠唱の言葉や手順を何年もかけて覚える。ウェイはそのひとつひとつに、それぞれ異なる癒しの目的がある。最も一般的に行われる「祝福のウェイ」は、個人の身体的・精神的なバランスを回復するために行われることが多い。「敵のウェイ」は、戦場で敵に触れたことで霊的なバランスを崩したディネ族の者に対して行われる。この癒しの儀式では、色のついた砂と砕いた木の皮を使って地面に砂絵が描かれる。

砂絵は、ディネ族の天地創造物語に出てくる出来事を描いた世界観図のようなもので、「双子の英雄」が怪物に勝利した場面を示すものと思われる。癒しを受ける人は砂絵の上に座り、詠唱者が特定の癒しのウェイを詠唱する。これらのウェイは全部終えるのに数日かかることもある。癒しのウェイでは、その手助けをしたい者の存在が成功の可能性を高めるとされることから、多くの人が儀式に招かれる。

単なるゲームとしか思えないような行事も先住民の儀式の一部であることが多い。現在ではラクロスとして知られているアメリカインディアンのゲームがそのひとつ。モホーク語で Tewaarathon と呼ばれるラクロスは、「偉大なゲーム」もしくは「創造主のゲーム」である。ゲームでは、距離が数マイルにも及ぶ野原が競技場として使われ、ひとつ以上の村の全員が参加することもあった。このゲームは、通常、一人の人間の健康回復を手助けするために行われ、その人物にささげられた。イロコイ族の預言者ハンサム・レイクは、1815 年にオノンダガ・ネイションを最後に訪ねた折に体調を崩した。死に至る病を患ったこの長老を回復させようと、直ちにラクロスのゲームが計画され実施された。（レイクの病気は治らなかったが、オノンダガ・ネイションの人々が与えてくれた栄誉に感謝し、レイクは次のように述べた。「わたしは間もなく新しい家に行く。間もなく新しい世界に足を踏みいれる。なぜなら、そこへわたしを導いてくれるはっきりとした道があるから」）

アメリカ先住民の間で最もよく知られた儀式のいくつかは、センセーショナルな扱いをされてきたか、誤解されてきたかのどちらかである。太平洋岸北西部の先住民に多く見られるポトラッチという儀式は、人類学者に「富を用いた戦い」と呼ばれている。人類学者の説明によると、ポトラッチは、部族の名士が、所有している物を大量にただで分け与えてしまうか壊してしまうことで競争相手に打ち勝とうとする儀式だという。カナダ政府と米国インディアン局は、ポトラッチがあまりに浪費的であると懸念を抱き、20 世紀の大部分にわたってこれを禁止した。事実、ポトラッチは、名声の確立や回復のためにこれ見よがしに行なわれる儀式であったが、先住民にとってはヨーロッパ人が考える以上の意味を持っていた。ポトラッチ自体は、ヌートカ語で「与えること」を意味する patshatl という語に由来する。個人による富の蓄積は、主流のアメリカ文化においては望ましい社会規範であるが、アメリカインディアンの文化においては全く逆だと言うことができるだろう。ラコタ族の偉大な指導者シッティング・ブルは、部族の者が自分のことを愛してくれるのは、自分が非常に貧しいからだと述べたことがあった。

物をただで分け与える伝統は、気前のよさを示すことで感謝を表す儀式として、北米の先住民の間で広く行われている。わたしが聞いた話では、モンタナ州に住むシャイアン族の家族は、自分たちの息子がベトナムから無事に帰還したら、大々的にポトラッチを行うと約束した。息子が戦争に行っている間、家族はポトラッチに備えて、毛布や缶詰などあらゆる品物を大量に蓄え、息子が無事に戻って来るとポトラッチを行なった。それまでに集めた物を全部分け与えただけでなく、息子の帰還を喜ぶあまり、自分たちが使っていた冷蔵庫やテレビ、レコードプレーヤー、ラジオ、軽トラックに加えて衣類まですべてを分け与えた。最後には、自分の家の譲渡証にまで署名して、他人にやってしまった。彼らは息子に対する愛情の大きさや Maheo（偉大なる神秘）への感謝を示しただけでなく、部族の中で大いに名を上げた。貧乏にはなったが、部族の者から見れば彼らは豊かになったのである。

ポトラッチは、物質的な富を少数者の手に委ねておかずに再分配する最高の手段であった。19 世紀後半には、毛布や他の品物がただで分け与えられただけなく燃やされるという一般的でないポトラッチが行われたが、これはヨーロッパの物品が流入し、白人と交易した者が過剰な富を蓄える可能性がでてきたことが原因のようである。ポトラッチは現在、感謝をささげ、物を分け与えることで名声を得るための儀式として、米国北西部の部族国家の多くで復活してきている。

儀式における歌や物語、踊り、衣装を通じて、またしきたりに従った所作やささげ物を通じて、われわれは自分を取り巻くすべての物と一体になっているということを思い出させてくれる。自分自身の中でバランスの取れた状態でいること、そして自分を取り巻くこの世界とバランスの取れた状態でいることは、適切かつ自然なことである。儀式は、われわれがそのバランスを認識し回復する手段と言えるだろう。

Our Stories Remember, by Joseph Bruchac. Copyright @2003, Fulcrum Publishing. All Rights Reserved.

グローバルな会話
ホセ・バレイロへのインタビュー

学者のホセ・バレイロは、ワシントンDCにある国立アメリカインディアン博物館（NMAI）の中南米局ディレクターおよび研究担当のアシスタント・ディレクターである。キューバ生まれで、タイノ族の血を引くバレイロは、その学者としての経歴を通して中南米およびカリブ海諸島の先住民族の研究に取り組み、この分野における有数の専門家である。コーネル大学でアメリカインディアン研究プログラムのアソシエート・ディレクターを務めた後、NMAIに移った。学術的な著作が多数あるほか、ジャーナリスト、編集者、小説家としても活躍している。

質問　世界各地の先住民族間の結び付きは、どの程度強いものなのでしょうか。

バレイロ　わたしにとって最も有益だった経験のひとつは、わたしがまだ若手の記者だった1977年、スイスのジュネーブで開かれた国連人権委員会の会議に先住部族の代表団の一員として参加したことです。わたしが同行したのはモホーク・ネイションの代表団でした。当時、わたしはこの代表団のための仕事をしており、「アクウェサスネ・ノーツ」という新聞雑誌の記者として会議を取材しました。わたしの妻はモホーク・ネイションで、わたしたちは彼女が住んでいた居留地で暮らしていました。国連という文脈で考えれば小さな会議でしたが、インディアンの人々にとっては、初めて会合でお互いに顔を合わせる非常に大きな会議でした。多くの人々が遠くからやってきました。最初の数日間は、各国の人々がそれぞれに抱える問題をめぐって講演が行われました。人々が悩んでいる問題点は同じようなものでした。すなわち、土地を失ったこと、文化の保存が困難なことなど、その種のさまざまな攻撃にさらされたことなどです。セネカ族の高齢の首長、コルベット・サンダウンのことを思い出します。コルベットはチリから来たマプチェ族の長老に話し掛けようとしました。わたしはスペイン語が話せますので、通訳をしました。マプチェ族の長老は、「なぜわれわれは、インディアンとしての存り方を話し合わないのだろうか」と言いました。コルベットの答えは、この長老を早朝にタバコを炊く儀式――コルベット自身の儀式であり、イロコイ族の感謝の気持ちを表す挨拶の仕方のひとつ――に招待することでした。この話が周辺に広まって、マプチェ族の長老以外にもたくさんの人々がやってきました。コルベットは、美しく広い範囲にわたる式辞を述べました。それは、人間を創造の輪の中に位置づけ、地下世界、母なる大地、そして森羅万象に感謝をささげて、自然界に対する称賛の念を表すものでした。「感謝の気持ちを持つことにより、わたしたちは心をひとつにまとめる」と述べ、続いて、タバコがたき火の上に落され、その煙がこの式辞を万物に、そして世界へと運んでいきます。マプチェ族、マヤ族、ホピ族、マキリタリ族、アイマラ族とケチュア族、すべての人々がそれに共鳴できました。「これだ」と集まった人々は言いました。これこそわれわれがここにいる理由だ。われわれの結束とは、実にこういうことなのだ。われわれはこれと同じようなことを表現したいのだから、と。

Courtesy National Museum of the American Indian, Smithsonian Institution

ホセ・バレイロ。中南米・カリブ海地域の先住民族についての有数の専門家で、タイノ族の血を引く。タイノ族は15世紀に西半球を探検に訪れたヨーロッパ人と最初に出会った先住部族である。

質問　共通の困難は何でしょうか。

バレイロ　異質の文化を強制的に導入されたこと、先住民文化を破壊しようとされたことが挙げられます。寄宿学校には、「インディアンを殺して、人間を救え」といった心理が働いていました。（20世紀初頭から中期にかけて、米国では、カナダ、オーストラリアと同様に、先住民の子どもたちが、西洋風の教育を受けるため、強制的に部族から引き離され、寄宿学校へ送られた。彼らは母語を話すことを禁じられ、近親者と会うことも許されないことが多かった。）貧困やアルコール依存などの社会病理現象も、場所によって程度に差がありますが、実際に見られるわけで、取り組みが必要です。教育者や医療従事者などが積極的な活動を展開しています。

現代テクノロジーが強引に入ってくると、その他の文化は決定的に失われます。そうしたことが意図的に行われる場合もあります。そこが初期の寄宿学校教育の問題点でした。その子の中に大切なものがあるということを認めなかったのです。子どもは空っぽの存在だと考えて、子どもの脳に文明を注ぎ込み、新しい人間を作ろうとしたのです。しかし、それは全くうまくいかず、たくさんの社会病理現象を生みました。自分が属する民族はあらゆる点で間違っていると教えられ、手本にならないと言われる。それによって、若い人々の心の中に、深刻な機能障害が生まれたのです。

しかし、人々が比較的強い力を持ち続けているところでは、衛星放送のアンテナとか自動車とかいったものが入ってくると、人々の適応能力がそれまで以上に発揮されます。弓と矢で狩りをする代わりにライフル銃を使うようになります。また馬を使う代わりに自動車を運転しますが、馬を完全に見限ってしまうことはあまりありません。馬は文化的な偶像あるいは象徴になるのです。毎年 8 月に開かれるクロー族の祭りに行けば、1500 のティピーと呼ばれるテント小屋に集まる膨大な数のプレインズ・インディアンが、5000 頭から 8000 頭もの馬を連れているのを目にすることができます。パレードあり、ロデオあり、パウワウの集会ありです。この祭りは観光客用ではなく、各部族のために行われます。観光客は歓迎されますが、それが第一の目的ではありません。馬は中心的な呼びものです。そのため、馬をビーズ細工で飾り立てますが、その技術は大変手が込んだものです。これは、多くのインディアンがやることです。わたしはグアテマラの高い山の上の方に行ったことがありますが、そこでもキチェ族のインディアンが似たようなことをしています。同じ文化的背景を持つ人々が集まるときには、古くからの伝統が必要なのです。これは西半球全体に見られることです。

質問　　あなた自身の祖先であるタイノ族はどのようにやっていたのですか。

バレイロ　　タイノ族には、早くからスペイン人や当初奴隷としてやってきたアフリカ人と結婚するケースが多く見られました。戦争や病気による大幅な人口減少もありましたが、同時に、山岳地帯や平原で暮らす農民「グアヒロ」として、どちらかと言えば孤立状態で何世紀も過ごした人々もいました。その結果、家族の知識の継承が保たれてきましたが、それはおおむね先住民の知識と言えるでしょう。この家族文化には、伝統的な治療法、薬草の利用、大地に生きる知恵、自然界の精霊への信仰などがありますが、いずれもそのまま残りました。キューバは、完全な無神論に基づくと考えられている社会主義体制になって 50 年経ちますが、今日でも、西半球のどの地域よりもスピリチュアルな要素が多く残っています。人々がどうやってこれらの知識を持ち続けてきたのかと思うと、本当に驚きます。今でもさまざまな形ではっきり見えるのですから。同じことは、プエルトリコやドミニカ共和国にも言えますし、そしてタイノ族という観点からは、大アンティル諸島全体に当てはまります。ジャマイカとハイチはそれほどでもありませんが。現在でも、田舎の家の様式、農業、薬草治療、祈りの言葉など多くのことに見られます。

質問　　今日の中南米・カリブ海地域における主要な問題は何でしょうか。

バレイロ　　全体的には、経済的な問題が大きくなっています。崩壊現象が起きているのです。現代的なもの、すなわち、新しく猛烈な勢いを持つ、速い通信手段や交通手段がこの辺りの地域社会に入ってきました。最も重大な崩壊現象が起きたのは地域農業です。わたしは、1970 年代初期のメキシコ南部やグアテマラのインディアンの市場を覚えています――山の中のどんなへんぴな村へ行っても、少なくともその土地の食べ物が豊富にある市場に出くわしたものです。その人たちは食べていくことができたのです。

ほとんどの場合、先住民コミュニティは土地に対して深い愛着を持っています。しかし、森林が破壊され、その土地での食料生産を諦めるようになると、人々は移動を始めます。仕事はありません。そんなとき、誰かがやってきて、アイデアを申し出ます。ここで米国、欧州、その他の市場向けのアスパラガスを植えれば、金もうけができるし、あなた方は農業労働者として働くことができますよ、と言うのです。しかし、こうしたやり方は地元の住民が実際に食べる食料の現地生産を駄目にします。生産物は、人々が住む地域では販売されないからです。現地の人々には、外部から入ってくる缶詰食品を買う経済的余裕はありません。メキシコやグアテマラ、ホンジュラスからこうして北へ向かうインディアンの人々は、農村に住む人々であり、経済状況がよほどひどくない限り自分たちの地域を離れはしない人々なのです。少し単純化しすぎですが、概して、地域の農業が強ければ、伝統文化も強くなり、結婚は長続きし、子どもたちは貧困に伴う病理現象に陥ることなく成長し、住民の生活は改善します。そうなれば、人々は自分が将来なりたいものになれるような教育を受けることが可能になりますが、それでも、大多数の人々は大地の上でうまくやれる仕事をするでしょう。大地に懸ける夢は今も強いのです。そして、その夢とは、大地との直接的な交流を通じて生きていくということなのです。ある意味で、これが原始的であるということの定義です。「原始的」という言葉は人を軽視する言葉として使われますが、その本来の意味は、人々が大地と「第一義的」な関係を持つということです。それはつまり、人々がこの木とあの木の違いを知っていることです。木には 1 本 1 本その目的があります。自然環境と地元の地理について一定レベルの知識があることが、素晴らしい生活を作り出す。これこそ伝統文化が生む素晴らしい生活です。そうやって、伝統文化は記憶されていくのです。

質問　　先住民は大地との精神的な結び付きを感じています。これは欧米の考え方と違った視点ですね。

バレイロ　世界観に違いがあります。それには、2 つの中心的な概念があります。ひとつは、この世では、すべての物はスピリチュアルに共鳴するということです。わたしたちが、死んでいる、生命がない、あるいは人工物だと考える物ですらそうです。地球そのものが生きています。これが生命の源です。この世にあるすべての物には、何かを伝えようという精神があり、それが眠っているときもあれば、目覚めているときもある。これが先住民の物の考え方にある超越的な原理です。

2 つ目は、この世にあるすべての物は、それが月であれ、小さな虫であれ、木であれ、その価値を認められなければならないということです。もちろん、人間ついても同じです。儀式に関する習わしは、それを表しているのです。それは、感謝をささげ、敬意を示すことなのです。敬意には、相互関係があります。お互いを認め合うことから敬意が生まれるからです。与え、そして受け取るのです。贈り物が贈り物を生み、尊敬が尊敬を生むのです。このような相互関係は人間に対してだけでなく、わたしたちの生命を支えるこの世のほかの要素、母なる大地がわたしたちにくれる贈り物にまで及びます。わたしたちは大地と協力し合っているのです。太陽が手助けしてくれます。雨が手助けしてくれます。そのようにして、母なる大地はその子どもたちを養っているのです。

質問　**部族コミュニティは深いきずなで結ばれていますね。**

バレイロ　先住民は「自分の居場所はどこか」といつも探しています。実のところ、個人は存在しません。わたしたちは社会的動物です。つまり、精神的な存在であり、共同体とつながっています。この考え方がわたしたちの中心にあります。そのため、先住民の居留地では、ビジネスで苦しい目にあうことがよくあります。例えば、いとこのジョーがガソリンスタンドを始めたとします。ジョーには貧しい親戚がたくさんいて、ガソリンを無料で分けくれと言われると、それを断れない。結局、ガソリンスタンドは倒産してしまいます。これは何度も繰り返された本当の話です。しかし、例えば今日、ガソリンをただで分けてやれば、2 週間後にいとこが戻ってきて、狩りで運よく手に入れた鹿の肉を半分もらえたりする。この持ちつ持たれつの関係は、うまく機能していれば、損得のバランスを保つ一環として常にそのプロセスに組み込まれているのです。またそこから学ぶことが常にあります。持ちつ持たれつの関係を悪用する人も必ずいますが、その人はそれに見合った評判を得ることになります。

質問　**博物館やその他の組織は効果的な対話とパートナーシップを促進すると思いますか。**

バレイロ　インディアンの人々によって育てられ、導かれる博物館である NMAI が、ここスミソニアンにあることは、西半球全体の先住民にとって大きな意味があります。彼らは、連邦議会から 400 ヤードの、ナショナル・モールの中に、インディアン博物館があることに好感を持っています。このような施設は大きな支えになります。またわたしたちには、本当の会話を妨げている問題を取り除くことができる文化と独特の気風があります。米国も世界もこれまであまりに多くの争いや憎しみを経験してきましたが、そこから抜け出る方法を、先住民の伝統的な約束や和解の仕方の中に見出す時代に入ってきているのかもしれません。

こうした対話を確立するための適切な基盤が見いだされれば、それを中心に世界で対話を進めることが可能になるとわたしは信じています。アメリカ大陸だけではありません。先住民族は世界中にいますし、それぞれが独自のパターンで文明化を経験する中で、先住民としての独自性を保ち続けた古代文化があります。先住民は人類という家族の長老のようなものです。ウォール街にいるあの連中は、長老ではありません。彼らは子どもで、非常に視野の狭い行動に取りつかれています。人生にはそれ以上のものがあります。わたしにはそれが分かっています。なぜなら、わたしは非常に貧しい人々が住む、辺りには何もない場所へ足を踏み入れ、そこで小屋に一人で住んでいるお年寄りの女性や男性と知り合い、その人たちの知的レベルや人間性に感動したことがあるからです。こういう人たちは真の教師でもあります。わたしには、彼らがわたしの先生だということがわかるのです。大学教授といった人たちもいます――教育が対話を奪ってしまうというわけではありませんが。でも、つまるところ、わたしたちが目指しているのは、こうした本物の対話なのだと思います。

この博物館の創設に当たっては、パートナーシップの構築のプロセスがありました。国連や米国内での 30 数年に及ぶこのプロセスにおいて、先住民にとって最も有益だったのはネットワークづくりでした。遠隔地にある先住民コミュニティから 2 人か 3 人をニューヨーク、ジュネーブ、あるいはワシントンへ送り出されてきました。その過程で、人権問題にかかわる弁護士やさまざまな基金の関係者と知り合いになります。また先住民同士も、環境・人権活動家、健全なビジネスアイデアを持った人々、教育団体の人々として知り合いになり、その中から、パートナーシップの強いエネルギーが表れたのです。米国民のパートナーシップも大変重要な要素になりました。米国民に、過去の出来事に対する同情心と周辺問題を理解できる知性を持ち続けた強力な一部の人々がいなかったならば、先住民族は生き残れなかったと思います。今日では、潜在的あるいは活動中のパートナーが広範にいます。わたしたちは、この博物館が世界的な議論と先住民の会話の交差点になることを望んでいます。インディアンの人々はそれを必要としており、世界はさらにそれを必要としているのです。

ホセ・バレイロへのインタビューの聞き手は、本 eJournal USA の副編集長リー・ターヒューン。

このインタビューで述べられている意見は、必ずしも米国政府の見解または政策を反映するものではない。

インドにおける CGNet と市民ジャーナリズム

シュブランシュ・チョーダリー

シュブランシュ・チョーダリーはインド人のジャーナリストで、英ガーディアン紙や英国放送協会（BBC）を経て、本稿のテーマである市民ジャーナリズム組織 CGnet の共同創設者となった。その画期的で、時には冒険的でもある取り組みを評価されて、2009 年、国際ジャーナリストの権威ある組織「ナイト・フェローシップ」の会員資格を認められた。

部族民が多いチャッティースガル州のジャーナリスト組合が発行している会員名簿に、アディバシー（原住民）の名前がひとつだけ載っている。その名前はカムレシュ・パインクラ。だが、彼はもはやジャーナリストではない。

チャッティースガル（CG）はインド中部の小さな州である。アディバシーと呼ばれる先住民の人口が圧倒的に多いことから、2000 年、それまで属していた州から分離してひとつの州になった。インド憲法は、総人口の 8 %を占めるアディバシーを「指定部族」として区分している。これら部族民の 75%はインド中央部に住んでいる。

アディバシーはインド社会の最貧困層を成し、さまざまな社会指標において最低レベルにある。その生活は、かつての不可触民（ダリット）よりも困窮している。政治的発言権はほとんどない。CGnet は、アディバシーの意見を人々に伝えるのを支援するために立ち上げられた。CGnet は、チャッティースガル州の人民のウェブサイトであり、すべての人がジャーナリストである。それは、市民のジャーナリズム・フォーラムであり、その使命はジャーナリズムの民主化である。ここでは、ジャーナリズムはいわゆるジャーナリストだけのものではない。

カムレシュ・パインクラはこう語る。「もし CGnet がなかったら、チャッティースガルでジャーナリズムに従事した結果として、わたしには 2 つの選択肢しか残されていなかったと思います。ひとつは、自殺すること。もうひとつは、マオイスト（毛沢東主義派）勢力に加わることです。第 3 の選択肢はありませんでした」 自殺は絶望したときの選択肢であり、インド農村部の貧しい人々の間では珍しいことではない。

マオイストはインドの左翼過激派で、アディバシーの人々の流血を伴う反乱の先頭に立っている。都市へ進出できないため、この 30 年間、森林地帯を本拠としてきた。インドの首相が、マオイスト（「ナクサライト」としても知られる）の始めた反政府活動はインド国内の安全にとって最大の脅威であると宣言したほど、状況は極めて深刻である。

コミュニケーションの欠如

現在、部族民の職業ジャーナリストはいない。それだけでなく、部族民とじかに話をすることができるジャーナリストもいない。識字率は極端に低い。というのも、インド憲法には、雇用、教育、土地問題について部族民のために積極的差別是正措置を取ることが定められているにもかかわらず、部族語で授業をする教育施設がないからである。その結果、社会は分裂し、部族民コミュニティと非部族民コミュニティとの間の対話が成立しなくなっている。

Courtesy Shubhranshu Choudhary, photo by Brendan Hoffman, ICFJ

シュブランシュ・チョーダリー。ジャーナリストで、インドの部族民に市民ジャーナリズムの研修を行っている。

コミュニティのラジオ放送があれば、部族の意思伝達手段として現在も使われている太鼓を補完できるのだが、ラジオ局は国営のオール・インディア・ラジオだけであり、部族語によるニュース放送はない。

インドでは規則により、地域コミュニティがラジオ局を持つことは許されていない。部族民の意見や問題が、主流のメディアに反映される例は限られている。

デリーに本拠を置く市民メディア組織「チャルカ」が、5 年前に CGnet が発足したときに実施した調査によると、地

方紙が一般大衆にかかわる問題について報道する記事の割合は、全体のわずか 2 %と極めて少なかった。

カムレシュ・パインクラが初めて CGnet に接触してきたのは、州政府が支援するサルバ・ジュドム（平和行進）と呼ばれる民兵が行った残虐行為を伝える記事を書いたために故郷を追われたときだった。警察署長はパインクラに、記事は誤りだったという謝罪文を書くよう求めた。パインクラが拒否すると、パインクラの兄が自宅にマオイストをかくまっているとして投獄された。この家には準軍組織である中央警察予備隊の将校が間借りしており、兄を助けるため口を利いてくれたが無駄だった。パインクラの友人の警察関係者は、警察がパインクラの殺害を計画しているとして、故郷を離れたほうがよいと助言した。パインクラはダンテワダへ移ったが、ジャーナリストの仕事は見つからなかった。CGnet の市民ジャーナリストたちは彼を支援しただけでなく、彼の取材活動を引き継いだ。

CGnet の市民ジャーナリストたちは、主流の報道機関が見逃していた人権侵害を暴露するのに一役買った。いくつかの話がこうした大手メディアに取り上げられ、人権活動家の注目を引いた。

アディバシーには口頭伝承が数多く残っている。その詩や歌はすべて、世代から世代へと口伝えで引き継がれる。CGnet は、アディバシーの豊かな部族言語と文化を保存するため、これらの口伝えの宝物をデジタル化して記録することにしている。

CGnet はアディバシーの若者に、自分たちの関心事をカメラ付き携帯電話で記録して伝えるなどの、市民ジャーナリズムの基本的要領を教えてきた。そうして記録された映像は CGnet のウェブサイトにアップロードされ、E メールを使って電子フォーラムで討論される。

声なき人々の声

サントシプールという村で 6 人のアディバシーが死亡した事件について、2007 年 4 月になってあるテレビ局が伝えた。警察当局はすぐに、彼らが警察とマオイストの銃撃戦に巻き込まれて死亡したとの声明を直ちに発表した。その後、CGnet の市民ジャーナリストの一人が、村人を殺害した警官隊の隊長のインタビューをひそかに録画した。その中で隊長はこの作戦行動の生々しい詳細を明らかにした。証言に基づいて、人権活動家たちがチャッティースガル高等裁判所に提訴し、州政府は事件の再調査を余儀なくされた。

こうした市民ジャーナリスト集団が、その数と議論の質の両面で力をつけているのを受けて、CGnet は隣接する 4 州の部族民にもその影響力を広げたいと考えている。これにより、共通の言語と文化を持ちながら行政上の境界線によって分割されてきた部族民がひとつにまとまり、似たようなコミュニティ同士が話題を共有して、彼らが「外の世界」と見なしているものとの対話を確立できるような拠点が生まれるであろう。

隣のオリッサ州に住むベテランジャーナリストのサマド・モハパトラは、「わたしの州にも、同じような場があればよいと思っており、CGnet の支援を受ける将来の市民ジャーナリストが全員集まって、より幅広く活動する市民メディア基盤を創り出すことを望んでいます」と言う。

CGnet は毎年、関係者が直接顔を合わせる会合を開いており、そこで信条や思想の違う人々が出会い、言葉を交わしている。前回の CGnet 年次会合では、鉱業界の代表と業界に反対する部族民が差し向かいでそれぞれの懸念や関心事について語り合った。チャッティースガルは、面積の 44%が部族民の住む森林である。そして、これらの森林地帯には豊かな鉱床がある。新経済政策により、工業化に向けての動きが加速しており、今や資源の豊富な森林地帯は、その鉱物資源の利用を望むインド企業や多国籍企業の注目の的になっている。

部族民は、自分たちは正規の教育を受けていないため、開発から取り残されるのではないかと懸念する。大手のマスメディアは、企業が所有するものや企業に大きく依存するものが多く、部族民の懸念や関心事に十分なスペースを割かない。

CGnet はこのギャップを埋めようとしている。CGnet のメンバーは一般のマスコミが報道しない、あるいは報道できないテーマを集中的に取り上げることにより、主流メディアを補完する役割を果たす。

インド政府当局が、この紛争地域においてコミュニティ・ラジオを許可するようになれば、CGnet の訓練を受けたアディバシーの人々は、自分たちの情報伝達ネットワークを持つことが可能になる。そのネットワークは、技術と少数のボランティアから若干の手助けを受けた、人民の、人民による、人民のためのメディアになるであろう。

ワシントンに本拠を置く「国際ジャーナリストセンター」も、CGnet がこの夢を実現するのを支援している。

チャッティースガル州のアディバシーの人々と長い間協力している NGO「バンバシ・チェトナム・アシュラム」のヒマンシュ・クマールはこう語る。「アディバシーの人々は、自分たちへの残虐行為に対してはっきりものを言わなかったため、不利な状態に置かれています。CGnet は、声なき人々に声を与えたのです」

本稿に述べられている意見は、必ずしも米国政府の見解または政策を反映するものではない。

世界的な先住民ネットワークの構築に向けて

ジョナサン・フック

Courtesy Jonathan B. Hook/UNT

ロシア・エカテリンブルグに近いウファ・シギリの先住民族の学生たち。儀式用の服装を着て、筆者が企画した文化交流行事を祝う。

ジョナサン・フックは、ノーステキサス大学（UNT）の新しいプログラム「国際先住民およびアメリカインディアン・イニシアティブ」のディレクター。　チェロキー・ネイションの市民であるフックは、アメリカインディアンおよび世界中の先住民族と協力して広範な活動を行ってきた。また米国環境保護庁の地方支部（テキサス州ダラス）で環境正義・部族問題室室長を務めたほか、米国国務省およびUNTと協力して、一連の国際先住民学生ビデオ会議の開催にかかわった。

会議場の窓を通して、アンカレッジでは珍しい太陽が、それほど遠くない山々の東の斜面の上で踊っているように見える。会議場内では、色鮮やかな正装を身にまとったさまざまな国籍の人々が、同時通訳用ヘッドホンを調節して演説に聞き入り、拍手を送る。この会議は、気候変動への国連の対応および緩和行動について、先住民が国際的な視野からどう考えるかを話し合うもので、会場は熱気にあふれている。

共通の経験によって結ばれた部族民たち

世界中の先住民コミュニティに共通する懸念すべき問題は数多くあるが、そのほとんどは、過去500年間のヨーロッパ人による物理的・文化的拡大の結果である。数え切れないほどの同じような個人的経験が、歴史の動向を示すさまざまな模様の中に織り込まれ、今日のわれわれが誰であり、何であるのかを表すタペストリーがつくり出されている。そこに織り込まれているのは、土地や言語の喪失、文化的自治権の保持、相反する世界観との共存、気候変動がもたらす影響の拡大などである。これらのテーマに対処するため、政府、NGO、大学、コミュニティグループなどが熱心に取り組んでいるが、ノーステキサス大学もそのひとつである。わたし自身がこれまで歩んできた旅の道のりは、ノーステキサス大学の「国際先住民およびアメリカインディアン・イニシアティブ」プログラムの創設に至るまでの、より広範な歴史的プロセスと密接にかかわっている。ちなみに、こうしたプロ

グラムがテキサス州で行われるのは初めてのことである。

わたしは、米国内にある600近い先住部族国家のひとつであるチェロキー・ネイションの市民である。子どもの頃、わたしは繰り返し、強制移動や苦しい闘い、生き残りをめぐる話に耳を傾けた。チェロキー・ネイション憲法会議にも代表として参加した。そして先住民コミュニティとその問題には常に関心を持っている。

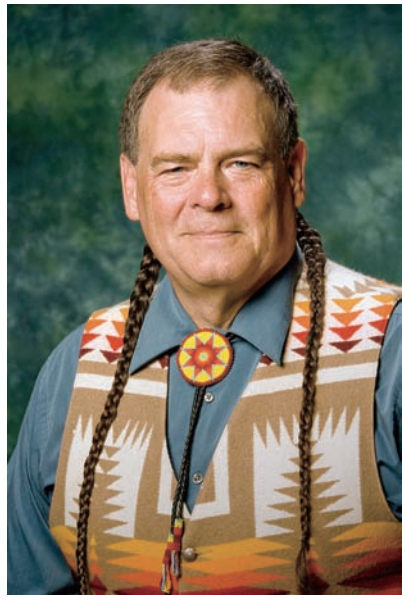
数年前、わたしはニカラグア西部でスティアバ族の指導者たちと一緒に腰をおろし、毎日午後になると発生する土砂降りの雨の音に耳を傾けていた。彼らは小さな辞書をわたしに見せ、大きな文化的・人的損失があったと嘆いた。少し前に、彼らの部族語を話す最後の人が亡くなったのである。言語の消滅は、文化的アイデンティティーの最大の指標と言っていいかもしれず、どの地域の先住民にとっても極めて大きな心配の種である。

この後、マレーシアのサラワク州とロシアのウラル山地の先住民コミュニティを訪ねたが、そこでも、部族言語の保持、文化の継承、環境保護、土地の保全、採算の合う継続可能な経済活動について、同じような心配があることが確認された。人々は以前から、アメリカインディアンの経験について話し合いたいと強く希望し、そしてアメリカ大陸の先住民と会いたいと願っていた。

テクノロジーが対話を容易にする

旅の資金を調達することはどんな場合でも難題である。そこで、ロシアで受け入れてくれたホストが、現代のテクノロジーを利用してビデオ会議を開こうと提案した。このアイデアを取り上げて支援してくれたのが、ロシアのエカテリンブルクにある米国領事館、マレーシアの米国大使館、それに米国国務省である。われわれは中学・高校生を対象に第 1 回「文化と環境に関する国際先住民学生ビデオ会議」を開いた。アメリカインディアン・コミュニティを代表して、キアレゲー・クリーク族タウンとカイオワ・ネイションの生徒、およびポンカ・ネイション評議会の議長が参加した。会議で、国際的に最も重大な問題として取り上げられたのは、気候変動問題であった。

ビデオ会議の結果、アメリカインディアンの学生数人がシベリアのアルタイ共和国に招待されることとなった。わたしと共にカイオワ族の学生 2 人と長老一人がシベリアへ行き、カトゥニ川の岸辺でアルタイ人の学生とキャンプをした。そこに到着すると、わたしたちは輪になってベンチに座った。その中心に、モンゴル式の正装で身を固め、弓を持った堂々たるアルタイ人の男性が馬で乗り入れてきた。彼は馬から降り、弦楽器を奏でるとともにアルタイ式の「のど歌」を披露した。夜の涼しさの中で、わたしたちはキャンプファイアの



Courtesy Jonathan B. Hook/UNT

「国際先住民およびアメリカインディアン・イニシアティブ」プログラムのディレクター、ジョナサン・フック

周りに座り、それぞれの文化から生まれた物語や歌を伝え合った。雨の降る午後は、ユルタという温かい円形のテントの中に入ってお茶を飲みながら、お互いの文化の類似性を探ったり、将来への展望を語り合ったりした。カイオワとアルタイの結び付きは目に見えて明らかであり、極めて近いものであった。

この数ヵ月後、4 人の若いアルタイ族の教育者が、オクラホマ州とニューメキシコ州のアメリカインディアンの指導者やコミュニティの住民と会うため米国を訪問した。わたしたちは、オクラホマ州北東部のチェロキー族(キートゥーワ・バンドとチェロキー・ネイションの人々)、同州西部のカイオワ族とコマンチ族を訪ねた。ニューメキシコ州アルバカーキでは、これらのシベリアからの来訪者は、全インディアンプエブロ評議会とビル・リチャードソン知事の会合に加わった。この後、サンタフェのすぐ北にあるテスキ・プエブロの指導者の家を訪れ、トウモロコシ、シカやヘラジカの肉、地元産の塩、園芸野菜、この指導者の果樹園で採れた果物など、すべてが先住民の食べ物から成る食事をごちそうになった。

ノーステキサス大学が、われわれのビデオ会議とそれに関連する活動に強い関心を示し、学長から第 2 回年次国際先住民学生ビデオ会議を主催したいという申し出があった。この会議には、前回より多くのアメリカインディアンの学生が出席し、大学関係者と共にインディアン文化の一部として受け継がれている踊りのエキシビションに参加した。

わたしは、テキサス州ダラスにある米国環境保護庁の地方支部で、環境正義・部族問題担当室の室長を務めていたが、

部族指導者や環境管理者、65の先住部族国家のコミュニティと協力して活動を行った。ノーステキサス大学は、環境正義・部族問題担当室と提携して、部族居住地に関する累積的リスク評価を先住民主導で実施したり、ハスケル・インディアン・ネイションズ大学との協力を通じてアメリカインディアンの教育機会向上を支援したりする取り組みにかかわった。このほか、ノーステキサス大学と協力の下に、アメリカインディアンや民族多様性、多文化主義に関するプロジェクトなども開始した。

国際先住民プログラム

テキサス州は米国でアメリカインディアン人口が 4 番目に多い州だが、先住民を支援するインフラがまったくない。州の連絡窓口やインディアン委員会は存在せず、ノーステキサス大学が「国際先住民およびアメリカインディアン・イニシアティブ」のプログラムを開始した2009年まで、同州にはアメリカインディアン関係のプログラムを持つ大学も皆無だった。このプログラムの名称は、世界中の先住民族が共有する問題が一続きであることを反映している。新しいプログラムのビジョンは、米国内外の先住民コミュニティの声に耳を傾け、それに応え、温情主義に陥らない方法で協力しながら、制度の整備や先住民コミュニティの発展をもたらすことである。

先住民族は何千年もの間、教育と創造的適応能力を重視してきた。アメリカインディアンの子どもたちは、それぞれの部族環境における模範に従って、特別な愛情や保護、教育を与えられた。500年に及ぶ病気や大虐殺、文化破壊によって、先住民は何世代にもわたって、西洋由来の教育・雇用・社会制度の中で直面する障害に適応・克服する手段を奪われた。一般的に、西洋の宗教、政治、教育制度はその文化的模範を温情主義的に先住民コミュニティに押し付けた。これにより文化的損失が拡大し、押し付けられた計画に対するアメリカインディアンの反感を招くことになった。現在、ノーステキサス大学のアメリカインディアンの学生数は、テキサス州の大学で最も多い。

効果的な関与のためのメカニズムとしては、最近設立された先住民諮問委員会（IAC）との会合、先住民コミュニティを現地訪問する際の注意深い観察、先住民および非先住民の出版物に目を通すこと、部族政府や部族組織の要望に積極的に耳を傾けることなどがあげられる。先住民諮問委員会はテキサス、オクラホマ両州のアメリカインディアンの人々で構成されており、保育、教育、法律、コミュニティ活動、部族政府、環境、ビジネスからスピリチュアルな指導に至るまで、広範な専門知識を提供する。この委員会は、文化的一貫性を確保するとともに、コミュニティにとって興味あるプロジェクトを見分けるという 2 つの役割を担っており、そのための準備を十分に整えている。先住民コミュニティに対して敏感に反応するということは、個別の要望を受けて速やかに対応し、積極的に活動することによって「インディアンにとって使える」機関になることを意味する。そのため、ノーステキサス大学は以下のような取り組みを行っている。

- 多様な先住民本位のコース
- 先住民研究（専攻および副専攻）の提供と各層への相当数の先住民教職員の配置
- 先住民学生の継続的な募集と資金援助
- 「アメリカ先住民墓地保護・返還法」におけるリーダーシップ
- 言語の保存
- 先住民設立の図書館蔵書の充実
- 存続可能な先住民学生組織
- 先住民に関する研究
- 先住民の専門家による学生の指導
- 先住部族国家、部族カレッジ、アメリカインディアン団体との関係強化

国際的な面で焦点を合わせているのは、気候変動の潜在的および進行中の影響をめぐって世界中の先住民コミュニティが共有している懸念への対応、およびこのテーマに対するノーステキサス大学の優れた取り組み能力である。このプログラムが本当に成功したかどうかは、大学内や世界各地の先住民コミュニティの生活が実際にどう変わったかによって判断されることになる。先住民コミュニティに対する気候変動の影響についての話をアラスカで聞いていたら、何年か前にわたしの娘がしていたプレゼンテーションが心によみがえってきた。娘は、輪になって座った子どもたちに毛糸の玉を 1 個与えて、まわし合いながら投げさせ、クモの巣のようなものを作った。それから、子どもたちにそれぞれが持っている毛糸を次々に引っ張るように言った。子どもたちは全員この引っ張る力を感じることができた。われわれはお互いに、またすべての生き物と影響を与え合っていることを実際に示したのである。このグローバルな生命の輪を称え、育み、支援するために、われわれの新しいプログラムは存在する。

本稿に述べられている意見は、必ずしも米国政府の見解または政策を反映するものではない。

補足資料

先住民族に関する書籍、記事、ウェブサイト、映画

BOOKS AND ARTICLES

Anaya, S. James, ed. International Law and Indigenous Peoples. Aldershot, Hants, UK; Burlington, VT: Ashgate/Dartmouth, 2003.

"Climate Change and Indigenous Peoples," Cultural Survival Quarterly, vol. 32, no. 2（Summer 2008）
http://www.culturalsurvival.org/publications/csq/32-2-summer-2008-climate-change-and-indigenous-peoples

Gordon, Raymond G., ed. Ethnologue: Languages of the World. 15th edition. Dallas, TX: SIL International（formerly known as the Summer Institute of Linguistics）, 2005.
http://www.ethnologue.com

Hall, Thomas D. and James V. Fenelon. Indigenous Peoples and Globalization: Resistance and Revitalization. Boulder, CO: Paradigm Publishers, 2009.

Howard, Bradley R. Indigenous Peoples and the State: The Struggle for Native Rights. DeKalb, IL: Northern Illinois University Press, 2003.

Alvin Josephy. "New England Indians: Then and Now," in Laurence M. Hauptman and James D. Wherry, eds., The Pequots in Southern New England: The Fall and Rise of an American Indian Nation. Norman, OK: University of Oklahoma Press, 1990.

Mithun, Marianne. The Languages of Native North America. Cambridge, UK: Cambridge University Press, 1999.

Miyaoka, Osahito, Osamu Sakiyama, and Michael Krauss, eds. The Vanishing Languages of the Pacific Rim. Oxford, UK: Oxford University Press, 2007.

Prucha, Francis Paul ed. Documents of United States Indian Policy, 2d exp. ed. Lincoln, NE: University of Nebraska Press, 1990.

Thornberry, Patrick. Indigenous Peoples and Human Rights. New York: Juris Publishers; Manchester, UK: Manchester University Press, 2002.

Wilkinson, Charles F. Blood Struggle: The Rise of Modern Indian Nations. New York: W.W. Norton & Co., 2005.

By Contributing Authors

Barreiro, José and Tim Johnson, eds. America Is Indian Country: Opinions and Perspectives from Indian Country Today. Golden, CO: Fulcrum Publishing, 2005.

Bruchac, Joseph. Our Stories Remember: American Indian History, Culture, and Values Through Storytelling. Golden, CO: Fulcrum Publishing, 2003.

Deloria, Vine. God Is Red: A Native View of Religion. Golden, CO: Fulcrum Publishing, 2003.

Deloria, Vine. The World We Used to Live In: Remembering the Powers of the Medicine Men. Golden, CO: Fulcrum Publishing, 2006.

Giago, Tim A. Children Left Behind: Dark Legacy of Indian Mission Boarding Schools [by] Tim Giago（Nanwica Kciji, Stands Up for Them）. Santa Fe, NM: Clear Light Publishers, 2006.

Grinde, Donald A. Jr. and Bruce E. Johansen. Exemplar of Liberty: Native America and the Evolution of Democracy. Los Angeles: UCLA American Indian Studies Center, 1991.
http://www.ratical.org/many_worlds/6Nations/EoL/

Hook, Jonathan B. The Alabama-Coushatta Indians. College Station, TX: Texas A&M University Press, 1997.

Johansen, Bruce E., ed. Enduring Legacies: Native American Treaties and Contemporary Controversies. Westport, CT: Praeger, 2004.

Kawagley, Angayuqaq Oscar. A Yupiaq Worldview: A Pathway to Ecology and Spirit [by] A. Oscar Kawagley. 2nd edition. Long Grove, IL: Waveland Press, 2006.

Mankiller, Wilma, compiler. Every Day Is a Good Day: Reflections by Contemporary Indigenous Women. Golden, CO: Fulcrum Publishing, 2004.

Mankiller, Wilma, and Michael Wallis. Mankiller: A Chief and Her People. New York: St. Martin's Press, 1993.

Weaver, Jace, Craig S. Womack, and Robert Warrior. American Indian Literary Nationalism. Albuquerque, NM: University of New Mexico Press, 2006.

WEB SITES

Declaration on the Rights of Indigenous Peoples (September 13, 2007)
http://www.un.org/esa/socdev/unpfii/en/drip.html

International Working Group for Indigenous Affairs
http://www.iwgia.org/sw617.asp

UNESCO Atlas of the World's Languages in Danger
http://www.unesco.org/culture/ich/index.php?lg=EN&pg=00139

Research Centers and Associations

American Indian Language Development Institute (AILDI), University of Arizona
http://www.u.arizona.edu/~aildi/

Amerind Foundation
http://www.amerind.org

Center for World Indigenous Studies
http://cwis.org

Indigenous Language Institute
http://www.ilinative.org

International Indigenous and American Indian Initiatives, University of North Texas
http://indigenous.unt.edu/

Library of Congress American Folklife Center
Resources in Ethnographic Studies
http://www.loc.gov/folklife/other.html#indig
National Indian Law Library

Native American Rights Fund
http://www.narf.org/nill/index.htm
http://www.narf.org/

National Museum of American Indian Library/ Smithsonian Institution
Cultural Resources Center
Collection relating to the indigenous people of the Western Hemisphere and Hawaii.
http://www.sil.si.edu/libraries/nmai-hp.htm

SACNAS
Advancing Hispanics/Chicanos & Native Americans in Science
http://www.sacnas.org/

FILMS

Dances with Wolves (1990)
Director: Kevin Costner
http://www.imdb.com/title/tt0099348/
A revisionist Western epic film that employed many Native American actors and incorporated Lakota dialogue, it won seven Academy Awards.

The Last of the Mohicans (1992)
Director: Michael Mann
http://www.imdb.com/title/tt0104691/
Oscar-winning film based on the novel by James Fennimore Cooper about fur trappers and Indians during the French and Indian War in colonial North America, starring Daniel Day Lewis and Indian actors Wes Studi and Russell Means.

We Shall Remain (2009)
http://www.pbs.org/wgbh/amex/weshallremain/
Director: Chris Eyre
A documentary series from the award-winning PBS program American Experience, "We Shall Remain" presents post-colonial history from the Native American perspective.

printed in Japan

米国大使館 / アメリカンセンター
レファレンス資料室

札幌アメリカンセンター・レファレンス資料室
〒 064-0821 札幌市中央区北 1 条西 28 丁目　米国総領事館内
Tel ：011-641-3444
Fax：011-641-0911

米国大使館レファレンス資料室
〒 107-8420 東京都港区赤坂 1-10-5
Tel ：03-3224-5292 （レファレンスサービス）
Tel ：03-3224-5293 （来館予約）
Fax：03-3505-4769

名古屋アメリカンセンター・レファレンス資料室
〒 450-0001　名古屋市中村区那古野 1-47-1　名古屋国際センタービル 6 階
Tel ：052-581-8641
Fax：052-561-7215

関西アメリカンセンター・レファレンス資料室
〒 530-8543　大阪市北区西天満 2-11-5　米国総領事館ビル 6 階
Tel ：06-6315-5970
Fax：06-6315-5980

福岡アメリカン・センター・レファレンス資料室
〒 810-0001　福岡市中央区天神 2-2-67
Tel ：092-733-0246
Fax：092-716-6152

米国大使館 のウェブサイト

米国大使館：http://japan.usembassy.gov/tj-main.html

American View：http://japan.usembassy.gov/american-view.html

レファレンス資料室：http://japan.usembassy.gov/j/ircj-main.html

アメリカ早分かり：http://aboutusa.japan.usembassy.gov/

携帯サイト：http://usembassy.jp

now on facebook

ENGAGING THE WORLD

A MONTHLY JOURNAL
IN MULTIPLE LANGUAGES

http://america.gov/publications/ejournalusa.html

U.S. Department of State, Bureau of International Information Programs